

水の文化



「水の文化」

平成14年2月

第10号

CONTENTS

第三回 水の文化楽習実践取材

かたちにならぬ「水の文化」を残すには？ 2

～ 寸劇「淳史君の溜池たんけん」に見る滋賀県湖東町の楽習実験～



第9回世界湖沼会議レポート 9

アジアの水辺から見えてくる水の文化 11

～ タイの首都バンコク トンブリー地区～

アジアまち居住研究会



水の文化書誌 《雨》 31

水・河川・湖沼関係文献研究会 古賀邦雄

第三回 水の文化楽習 実践取材

かたちにならぬ 「水の文化」を残すには？

～ 寸劇^{あつし}「淳史君の溜池たんけん」に見る滋賀県湖東町の楽習実験 ～

昨年11月、滋賀県大津市で開かれた「第9回世界湖沼会議」で「水の文化を表現する」と題したワークショップが開かれました。ここで、自ら暮らす地の溜池について聞き取り調査した結果を寸劇に仕立てた発表が行われ、このプログラムは国内外の参加者から盛んな拍手を浴びました。

演目は「淳史君の溜池たんけん：Exploring the local knowledge through surveying the neighboring ponds」。演じたのは滋賀県愛知(えち)郡湖東町大澤の皆さんでした。

「水の文化」を表現するのに、なぜ「劇」なのか。今回の取材はこの疑問から出発しました。劇中で表現された昔からの伝承漁法や地搦唄(ぢづきうた)、地元の言葉使い、溜池の配水ルール、溜池を大切に
する理由・・・このような無形の水の文化を後の世代に残すのに、もしかしたら「住民による聞き取り調査」と「劇による表現」という組み合わせはたいへん効果的なのかもしれません。

今回は、形として残らない文化を伝える「水の文化楽習」プログラムを紹介いたします。



左から西堀榮三郎記念探検の殿堂館長の嶋林栄さん、学芸員の角川(すみかわ)咲江さん。



左から「淳史くん」こと福田淳史さん(滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科)、「源四郎おじいさん」こと野村源四郎さん、「典子ねえさん」こと山口典子さん。この劇の舞台回し役として登場する3人だ。



西堀榮三郎記念探検の殿堂



第9回世界湖沼会議のワークショップで「淳史君の溜池たんけん」演じる湖東町大澤の皆さん。

聞き取り調査と劇による表現



西堀榮三郎の記念館
探検の殿堂

八楽溜池

八日市



上：湖東町大澤は、名前の通り琵琶湖の東側、鈴鹿山脈の麓、湖に添った平野部にある。

左：親水公園として残った八楽溜池では、実際に昔の道具「蛇車」(じゃぐるま)も使って、水を確保することの大変さを説明してもらった。

劇で伝えたい水と暮らし

湖東町は琵琶湖を取り囲むように広がっている滋賀県の東部、近江八幡市にほど近い農村地帯にある。人口は約九千人あまり。今回の寸劇を上演した皆さんが暮らす大澤(おおさわ)は六十五戸の集落から成る地区だ。同じ湖東町には、第一次南極地域観測越冬隊隊長として知られる西堀榮三郎氏の記念館「探検の殿堂」(一九九四年に町営で設立)がある。

今回の寸劇は、この記念館の事業の一つとして二一年四月から始まった「溜池たんけん隊」の活動成果を、劇仕立てにしたものだ。「溜池たんけん隊」には、湖東地域に住む親子と、滋賀県立大学の学生が中心に、ボランティアグループ「ガッハの会」湖東地域の環境を考える会」他のサポートを受けた約九十名が参加した。

かつては湖東町に五十五もあつた溜池は、圃場整備後は十七に減り、必要のなくなった溜池は埋め立てられ、田んぼや宅地に姿を変えた。そこで、溜池をテーマに現地踏査を行い、自然に触れ、そこに暮らしている方からお話をうかがう聞き取り調査を行ったのだ。

溜池たんけん隊のみなさんが世界湖沼会議会場で配布したパンフレットには、彼等のメッセージが載せられている。

湖東地域には、江戸時代などに造ら

れた溜池が多くありましたが、農業用水の確保のためダムができ、圃場整備事業が行われたことによって、いくつもの溜池が農地や建物の敷地に変わりました。しかし、湖東町の大澤という集落では、快適な農村づくりの一環として、「八楽(はちらく)はちらく」溜池」を新たに親水公園として整備しました。しかも、この溜池は、昔から農業用水だけでなく、防火用水などとしても集落には欠かせない存在であったため、その特徴を生かして溜池の水をパイプラインで集落とその周辺に引き込み、現在も利用しています。また、溜池を住民の憩いの場としたりしているなど、生活の中で今も活用されている数少ない事例の一つといえるでしょう。

本日の私たちの発表を通して、そこに住む人々の心や営みが、みなさま方に少しでも伝わり、これからの私たちに「溜池や湖沼、河川などを共有する者」が、「水と暮らし」と、どのように関わっていかねばならないかを考えるきっかけになれば幸いです。

劇でない伝わりたくないこと

劇は、大学に入学したばかりの「淳史くん」と「源四郎おじいちゃん」「典子ねえさん」三人の茶の間での会話から始まる。テレビ放映された昔のオオギ漁(溜池で、オオギという漁具「伏せ籠」を使い鯉をつかむ漁)の映像を見て、「オオギ漁って、なにい」と尋



上：滋賀県立大学の聞き取り調査にも、積極的に協力している湖東町大澤のお年寄りたち。この日は大澤町の地蔵院に向う。

下：2001年7月に開催された溜池シンポジウム「八楽溜と大澤の今むかし」「カトリ」を中心に、いのちを分け合うことがテーマとなった。

左上：溜普請に使った瓢箪石 大澤の人たちは、昭和30年代後半までは、農閑期の春先に溜池を補修するための協同作業「溜普請」を行っていた。石に何本もの縄を巻き付けて、皆で縄を引っ張りあげたり落としたりしながらドスンと土手を固めた。

左下：昔ながらのオオギ漁の様子を再現。大学生も体験した。単なる聞き取りではなく、実際に体験するということが大切だ。



ねる淳史くんにおじいちゃん源四郎さんがよしとばかりに「お前さんには、わからんよなあ。そーりや面白いもんで。」と若い頃を思い出しながら、身ぶり手ぶりを交えオオギ漁を楽しそうに語り出す。これに興味を覚えた淳史くんは、「溜池たんけん隊」で半年間の調査を行い、そこでわかったことを源四郎おじいちゃんに聞いてもらう。そこで、「八楽溜（はちらくだめ）」と呼ばれる大澤に唯一親水公園として残った溜池が、かつてはどのような利用されていたか、「貰い風呂」の習慣、「カトリ」という分水のしくみ、溜池を維持するために土手を固める「ひょうたん石」の使い方、「溜普請（ためぶしん）」の後に食べる「かしわめし」、オオギ漁の様子、昔の諺などを、「地元の言葉」でやり取りしていくのだ。

住民による調査を単に発表するだけならば、取り立てて珍しいことではない。ただ、こうした発表は、地元の方にとっては、何となく現実感がないか当たり前のことをただ並べているだけと映ってしまう危険性が往々にしてある。現実感が感じられないのは、地元の人々の暮らしのルールや習慣が、一見客観的な書き言葉や数字で削ぎ落とされてしまうからだ。また、具体的な聞き取り結果をただ並べただけでは、「そんなことは、口には出さないけれど、わかっている」と思われてしまうところ、劇だとそうはいかない。

今回の劇では、「聞き取る側」「聞かれる側」双方が出演者。しかも、全部実名だ。調べたこと、すなわち劇で伝えられることは、すべて自分達の現在の生活や、自らが体験してきた暮らしの記憶でもある。自ずと、ありのままの暮らしを出さないと、演じている本人達の気がすまない。かくして、具体的な調査成果と、人々の暮らしのルール・習慣が丸ごと盛り込まれ、湖東町大澤の物語が生まれることになる。調査成果を物語として表現することで、見えないものも丸ごと伝えてしまうことができるのだ。

探検の精神はそのまま

目線は「地元」

「こうした試みは、なぜ生まれたのだろうか。やはりここにも中心となる方がいた。今回の中心者は、西堀榮三郎記念館探検の殿堂の学芸員・角川（すみかわ）咲江さん、館長の嶋林栄さんそして劇中で「源四郎おじいちゃん」を演じた野村源四郎さんだ。

西堀榮三郎といえば初代南極地域観測越冬隊長にして真空管の発明などでも知られるパイオニア精神の固まりのような方で、記念館は氷点下二五度の疑似南極体験もできる立派な施設を備えている。ただ、入館者は徐々に減ってきていたこともあり、二一年度この記念館を今後どうするべきか考えてみることにしたのだ。町の人からも、



上：2001年8月12日に開催された、大澤運動会でのボートレース。この年、初めて八楽溜で運動会が行われた。ボートレースは大変人気のあった種目。

下：聞き取り調査の後には、話の中に出てきた「かしわ飯」が炊かれ、参加した人たちみんなで会食。同じ釜の飯を食う「なおりい」でいよいよ交流を深める。



地搦唄 (ぢづきうた)

地搦唄は、大澤の溜普通語で歌われた労働歌だ。源四郎おじいさんや地元の方々が調子を合わせて歌っていたのだ。

一 あ、腹が立つ時や この子を見やれ (シラ) 二の三をみやれ
仲のよい時 できた子じゃ おもしろや

イヨノエ ヒヨウタンヨー ヨイシヨ ヨイシヨ ヨイシヨ

一 あ、前の兄さん 一節たのむ (シラ) ひつしたのむ
杵が 勇むよくな 地搦唄 おもしろや

(くりかえし)

一 あ、お医者さまでも 草津の湯でも (シラ) くさつしたのむ
恋の病は 治りやせぬ おもしろや

(くりかえし)

一 あ、恋の病も 治せば治る (シラ) なおせばなおる
好いたお方と 添や治る おもしろや

(くりかえし)



地搦唄の第一人者
杉浦信雄氏

「せっかくの施設なのにもつたいない」という声もあがってきた。この機会を「チャンス」と考えたのが角川さんだ。「もしかしてこれはチャンスかなと思いました。本来の意味での町営博物館住民が自分たちのものだ実感できる地域に開かれた博物館に再生できないものかと思いました」

この角川さん。実は東京都の出身だ。彦根市出身のご主人と結婚してこの町に勤めている。もっともつと湖東町を知りたい、何かきつかけがつかれないものかと考えていたのだ。そして、博物館の今後の方針を検討する委員会ができ、彼女はその舞台回しにあたることになる。この委員会の委員で、その後強力なサポーターとなる、滋賀県立大学地域文化学科の武邑尚彦助教授や琵琶湖博物館の嘉田由紀子氏からは、「上から見下ろすような博物館ではなく、地元の意見、地元の子供たちからも意見を求めたいかがですか」とアドバイスをいただいたという。

こんな時、角川さんは「記念館の存続の決め手になる企画ってなんだろう。ここを起点に何か面白いことができないだろうか」と、考えていた。そんなある日、あるところでわら細工を目にした。「この作り方を、こどもたちに知ってもらつとおもしろい」と、すぐにその場で「これ作った人誰」と尋ね、角川さんは野村源四郎さんに出会うこととなる。現在七十四歳の源四郎さんは、県認定の農の匠にも指定された方。伝

統技術の継承者名人である。頭の中は湖東町の情報・人材データバンクのような方で、七十年来の友だちネットワークをもつ地元のキーマンでもあった。「お元氣だし話が楽しいんですよ。源四郎さんのおかげで『ガツハの会』は芋蔓式人材バンク状態なんですよ」と記念館の角川さん。「ガツハの会」会長、人づくり町民学芸員としても大活躍の源四郎さんだ。ちなみに「ガツハの会」は、探検の殿堂のポランティアグループ。会名の由来は「私が『ガハハ』と笑つたら」と豪快な笑みを浮かべて語っていた角川さんには、皆をその気にさせる原動力がみなぎっていた。平成九年、当時の館長だった野村信太郎氏（現在は大澤区長）は、西堀榮三郎の「探検精神」を受け継ぐ活動として、町内の子供たちや保護者に呼びかけ「湖東探検クラブ」をスタートさせた。山に登つたり、水鳥を観察するなど、町外、県外のいろいろなところへ探検に出かけていった。しかし、よく考えてみると「足元の地域」に目を向けた活動が少ない。そこで、平成十三年からは、何でもよく知っている地元の名人、達人を巻き込んでの、ものづくり教室から、湖東地域を中心に溜池を探検することまで、開かれた探検精神で活動するメニューが博物館事業として増やされた。そこへ地元の人たちも「応援団」(「ガツハの会」や湖東地域の環境を考える会)として合流し、さらに、滋賀県立大学地域文化学



湖東町大澤のみなさん総出で「水の文化」を伝えるために熱演。国内外の世界湖沼会議参加者も大拍手。



科の学生たちが参加（協同プロジェクト）するようになり、町行政（博物館）と地元住民、そして大学（教育機関）、三者の連携が生まれることとなった。

目標ができと皆がまとまる

さらに追い風が吹いてきた。二一年二月頃「世界湖沼会議で、この溜池探検でわかったことを、発表してみないか？」と、話が舞い込んできたのだ。湖沼会議といえば十一月。あと十ヶ月しかない。できるだろうか。ところが、終わってから振り返ると、心配は無用だった。具体的な目的が与えられたことで、みんなの行動力が猛烈な回転を始めることとなったのだ。

嶋林館長は当時をふりかえって言う。「町では郷づくりや溜め池イベントが進んでいた時で、タイミングも良かったのです。うまい具合に八楽溜を題材にする寸劇発表の話が舞い込んできた。世界湖沼会議での寸劇発表の決定が、町の盛り上がりとうまくドッキングしたのですね。応援団のメンバーも人が人を呼ぶように集ってききました」

滋賀県立大学が協同プロジェクトとして企画し、記念館も正式な事業としてサポートした。嶋林館長は、シナリオづくりから実際の芝居づくりという初めての体験で、これまでの「溜池たんけん隊」のフィールドワークや聞き取り調査が一気に生かされることになったと考えている。

「溜池の歴史をただ紹介するだけでなく、源四郎さんはこの湖東地域のお年寄り代表、淳史くんは若者代表、典子さんは新旧世代の間でそれをつなぐ代表というように、このような役づくりを、皆でああでもないこうでもないとい練りながら、それぞれの世代代表の心のプレゼンテーションができた僕は思っているんですよ。それに聞き取り調査を体験されたお年寄りたちが、自分の言葉で語ることの新鮮さを知って出演しながら意識が変わっていった。自分たちの文化を伝えるためにしっかりと協力しなくては、とね。芝居づくりが参加している人たちの誇りを引き出したんです」

あたりまえは、あたりまえのことではない

この言葉はたいへん興味深い。最初源四郎さんは「むしろ年寄りは先祖から伝わってきた技術でも知恵でも、何でも伝えたいと思っているんや。若い者が聞いてくれたらいくらでも答える。聞いてくれるのは嬉しいこつちゃ。でも、昔のことを言つと、ばやきと思われるから」と思っていたという。そして、滋賀県立大学地域文化学科の学生さんたちと交流が始まったことは、これまでになうれしい体験で、それは聞き取り調査に協力している他の方も同じ感想だと語ってくれた。すでに三十年以上、溜池はこの地の

人々の意識の上では「特別に語るものではない、あたりまえのもの」であり、そのまま心の中にしまわれ、「過去のもの」とラベルを貼られ、埋もれていた。溜池にまつわる伝承や行事も、みんなの心に残りながら、世代としてはつながらない。「忘れられた」のではなく「つながらなかった」のだ。

限られた水が、かつては、どれほど貴重なものであったかという体験談や言い伝え、溜池の掟や暗黙のルール、水を循環させながら見事に使いきる暮らしの知恵、溜池を修理し保全するた

めのきめ細かな管理技術、人の手になるさまざまな工夫。そんな「あたりまえ」と思っていたかつての生活のひとこまひとこまに、たんけん隊の若い世代が感心し驚く様子に、お年寄り世代は逆に励まされ、誇りを取り戻す。

滋賀県立大学地域文化学科学四年生の武藤恭子さんは「五十年くらい前のことでも、私にはちよつと想像できないような、まるで別世界のお話のように聞こえるんです。溜池の水が流れる力ワトに布団力パーなどの大きな洗濯物を持って行って洗ったり、井戸からつ



上：田んぼの水入れを公平に行うため考えられた仕掛け。溜池から流れて来る水を田んぼの耕作面積に応じて、石と木で水平に塞ぎ止め川幅を決めて配水した。水を分割して取る、「割取り」と書いて「カトリ」。本誌1号で紹介した香川県満濃池の分水のしくみ「線香水（線香の燃えている時間で配水時間を管理する）」と対比すると興味深い。

左：水路より高い所にある田んぼには、蛇車と呼ばれるもので、足踏みにより水を汲み上げていた。これも女性にとっては大変な仕事だった。（昭和34年6月。彦根市の日夏町地先）

るべで水を汲むたいへんさとか、貴重な水を無駄無く使うために、たいへんな労働があったこと。それを皆さんが苦勞と思っていないのがすごいと思いました」

淳史くんたち若い世代にとっては、単に昔からあったにすぎない八楽溜が、「溜池たんけん隊」に参加してからすっかり違う意味をもって見えた。自分の町の普通のおじいちゃん、おばあちゃんによって語られる話はどれも、普段の暮らしで、あたりまえのようにある「苦勞」と「知恵」に溢れている。何でもないことのように語られる水にまつわる苦勞話や、生活の細部にわたる知恵の蓄積に、若い世代は「すごい」と驚き、素直に感動する。

語る側のお年寄りも、今まで同年代の同じ苦勞をしてきた者以外に語る機会のなかった苦勞話・昔話が孫世代の若者たちに真剣に聞かれ、学生たちの勉強に役立つことがわかってくると、「次に来た時には、こう話そう、あんな話もしてみよう」と、伝える話を意識しながら、自分たち世代の生きてきた時代を筋道だてて振り返ることができたようだ。

自分あたりまえのことと感ずる事は、必ずしも他の人間にとってあたりまえのことではない。むしろ「驚き」なのかもしれない。同じ屋根に住む家族同士でもそうかもしれない。そして、何が「驚き」なのかは、お互いが話してみないと分からないが、一旦、驚き

があった時、お互いの距離はぐんと縮まり、楽しい関係が幾重にも編まれていくこととなる。

「あたりまえ」は「あたりまえのことではない」。

劇に仕立てるのは楽しい

さて、多くの聞き取り結果を、次はシナリオにしなくてはならない。角川さんは「実はこの劇は正月一ヶ月の稽古しかできなかったんです。シナリオの完成が遅れに遅れたものだから、『世界湖沼会議』という、すごい所で発表できることになって、それも九百近い希望団体の中から選ばれたものだから、皆、張り切りまして。シナリオづくりから、ああでもないこうでもないとたいへんだったんです。全員芝居経験などない素人で、でも自分たちの言葉で伝えたい思いが強く、あちらを立てればこちらが立たず。あれも言いたいこれも言いたい。それで、なかなかまとまらないんです。国際会議ですから同時通訳用に完全シナリオを提出しなければならいんですが、結局出来上がったのは上演三日前」。

みんなが自分の言葉で語りたいため、結局時間がかかったというわけだ。若い淳史くんたちも、ふだんはただのおっちゃん、おばちゃんと思っていた人の凄さに感動したと言つ、「人が作ったお話ではなく、これは自分たちの言葉や」というこだわりが生まれ、うそではな

かたちにならぬ「水の文化」を残すには？

い生きて言葉や言葉を皆で掘り起こす楽しさがあったという。誰もが「自分たちのほんものの言葉とは何だろう」とこだわり、考えに考え、そこにある暮らしの現実感の大切さに気付き出したのだ。

あたりまえから生まれる、
きらりと光る一言

こうして出来上がったシナリオだけに、劇には迫力がある。

大澤では、一九六二年（昭和三十七年）頃までは四年に一度、村中の住民が八楽溜に集って「オオギ漁」を行っていた。池の水をぬいてから、オオギという籠状の漁具を伏せて養殖の鯉を掴ん



上：昭和30年代まで、農耕の主役は牛であり、湖東地方でも多くの農家で牛が飼われていた。（昭和36年3月。近江八幡市の大房町地先）

右：湖東町大澤では、4年に1度、八楽溜でオオギという漁具を使った「総つかみ」の行事を行っていた。字中が総出のこの行事は、魚つかみと同時に、溜底の泥さらいをする目的もあった。平成10年には31年ぶりにオオギ漁が復活した。子どもが手にしているのがミスクイ（昭和37年10月）

下：これら写真を撮り続け、今回写真を御提供いただいた野村しずかずさん。



で生け捕りにする。村中総出でこのオオギ漁に興じて、捕った鯉はお正月の料理として食べるという娯楽のイベントである。このオオギ漁を、「鯉はよけ捕れるし、その鯉の美味しかったこと」と劇中で源四郎じいちゃんはなつかしがる。

「溜の水はな、上（かみ）の集落の田んぼの排水や雨水を入れて溜めるんや。大雨でも降るとね、濁り水が流れてきて、水とともに流れてくる泥が水の底にたまって、年々溜が浅くなるんや。そうすると、当然貯水量が少なくなる。そやから四年に一度、村中の人が出て、男はオオギ、女の人や子どもはミスクイを持ってバチャバチャと鯉を捕まえ

ながら、水の中を歩き回ること、溜の底の泥と水をかきまぜて、一気にどつと流し出す。これを何度も繰り返して、底にたまった泥を流し出して、貯水量を確保するための大掃除だったんや」

淳史くんは、あの八楽溜でそんな行事を昔していたこと、しかも源四郎じいちゃんたちが総出でこの溜池を守ってきたことを知る。溜池は自然の一部、子ども頃から当たり前にそこにあるものと思っていたのに。

人が「わかち合い」の気持ちをもって生きていくこととする中から生まれてきたものやと、源四郎さんに教わったような気がしてるのよ」と語っている。

もしかしたら、こうしたきらりと光る言葉も、大澤のみなさんにとってはあたりまえのことなのかもしれない。でも、都会暮らしの人間が見たら、また違う感想をもつのではないだろうか。

持続する学生との関係

「お米をとるためには、長い期間、四月から八月までやけど、よけ（たくさん）水が流るので、日照りが続くと米とれへんのや。それで、昔の人が苦労して造った水溜なんや。だから人の手があるんや。昔から道は道普請、川は川掘り、溜は溜普請というてな、村中の人が集って修繕してたんや」溜池は人が造って人が手入れし、長い間この地に暮らす皆が守ってきたものだということに響くように伝わってくる。

また、劇中では「カトリ」の説明を聞いた淳史くんが「田んぼの面積に応じて公平に（分水する）」と感心するのに対し、源四郎おじいさんは「まあ、みんなが生きていくためには『分かち合い』の気持ちは強かったな。そうせんと、田んぼは十分に作れなかつたんや。強いもの勝ちでは、いかんということや。だから、溜をみんなで修繕して守っていくのも、当たり前のことやったんや」と話す。そして、最後に、典子姉さんは「様々な技術や知恵は、

今後「溜池たんけん隊」はどのように発展していくのだろうか。一月に開かれた反省会ではいろいろな意見が出された。探検は継続させながらも、他に行うテーマは目白押しということだ。劇で注目を集めるようになった源四郎さんは、方々からひっぱりだ。記念館の角川さんは「いろいろな名人暮らしの知恵を持っている方が、湖東町の中だけでなく、湖東町民として外へ出て行って活躍して欲しい。また、『溜池研究会（仮称）』の発足が決まっています。学生たちは、次に野井戸の調査を始めようとしているよです」と、笑みを浮かべていた。

最後に、劇中での淳史くんの台詞を紹介したい。

「夢中になって遊んで実感する。例えば遊びやったりとしても、昔の人たちの気持ちに少しでも近づけることができた、ほつから環境問題について考えることもあるんちゃうかな？」



世界の湖沼環境問題にも「文化」の眼差し

第9回 世界湖沼会議 レポート

2001年11月11日(日)~16日(金)の六日間にわたり、「第9回世界湖沼会議」が滋賀県大津市で開催された。テーマは「湖沼をめぐる命といとなみへのパートナーシップ~地球淡水資源の保全と回復の実現に向けて~」。世界75カ国から約3600名の参加者が集まった。

会議にとっては、水質・生態系改善が依然として大きな問題ではあるが、こうした問題を解決するためにも、もはや「水の文化」を避けて通ることはできないと、水と社会の関わりに関する二つの分科会が設けられた。

世界湖沼会議とは

この国際会議は、湖沼に関するさまざまな環境問題について、研究者、行政、市民などが一堂に会して、問題解決に向けた取り組みを考えていこうとする会議で、過去八回、世界各地で開催されてきた。創設の発端となったのは、一九八四年に滋賀県が提唱した、世界の湖沼環境の保全に関する国際会議。この会議の精神は、国連環境計画(UNEP: United Nations Environment Programme)の全面的協力を得て、滋賀県が支援をする(財)国際湖沼環境委員会(ILEC: International Lake Environment Committee)というNGO組織を生み、その後概ね二年ごとに世界各地で継続開催されるようになっている。

開催年 開催地 テーマ

1. 1984 滋賀県 人と湖の共存の道をさぐる
2. 1986 アメリカ 巨大湖沼における毒性物質の挙動と管理
3. 1988 ハンガリー メインテーマ設けず
4. 1990 中国 メインテーマ設けず
5. 1993 イタリア 21世紀に向けた湖沼生態系保全戦略
6. 1995 茨城県 人と湖沼の調和 ~持続可能な湖沼と貯水池の利用を目指して~
7. 1997 アルゼンチン 美しい湖沼環境を次の世代に残すために
8. 1999 デンマーク 持続的湖沼管理
9. 2001 滋賀県 湖沼をめぐる命といとなみへのパートナーシップ ~地球淡水資源の保全と回復の実現に向けて~



世界湖沼会議は、一九八四年に発足以来十七年の間に世界各地で八回の会議が開かれ、今回の会議はいわば、二十一世紀初に再び滋賀の地で開かれた「里帰り会議」というものだった。この十七年の間、湖沼環境をめぐる課題にも変化が見られることは、テーマの変遷を見ても一目瞭然だ。第五回大会当たりから湖沼環境の持続可能性(Sustainability)に関心の重心が移ってくる。湖沼環境を多世代に渡り守っていくためには、生態系の問題だけではなく、地域の制度や文化にまで目を広げざるをえない。

今回設けられた五つの分科会は、第一分科会「文化と産業の歩み~環境共生のライフスタイルを考える」、第二分科会「環境教育の新たな展開~学んで・知らせて・共に活動する」、第三分科会「飲み水と汚染~きれいで安全な水を創る」、第四分科会「水辺の生態系とくらし~壊れやすい水と陸との接点(エコトーン)をどのようにするか」、第五分科会「循環する水~流域で共存する人と自然」。この内、第一分科会や第二分科会で、湖沼会議の歴史の中で初めて、「水の文化」を前面に掲げた分科会が設けられることになったのである。

湖沼環境問題の検討になぜ「文化」の視点が欠かせないのか。今回の会議の数年前より文化の重要性を強調され会議の準備に当たってきた嘉田由紀子氏(京都精華大学人文学部教授、滋賀県立琵琶湖博物館研究顧問)にお話をうかがうと興味深い答えが返ってきた。

琵琶湖宣言2001

湖沼は、水資源として重要なだけでなく、各地域の多様な生態系を維持し、さまざまな文化を育んできた。しかし、「琵琶湖宣言」・「霞ヶ浦宣言」における決意にもかかわらず、湖沼の多くにおいて環境は依然として悪化し続け、湖と人との調和した共存関係の崩壊しつつあるのが、残念ながら現実である。私たちは、湖沼がかげがえのない存在であることを再認識し、20世紀のとりわけ先進国型の生産・生活様式を批判的に見つめ、かつ、発展途上国の置かれた困難な社会経済状況を認識しつつ、人類と地球の未来のために、湖沼環境を持続可能な状態に緊急に再生していかなければならない。

第1回世界湖沼会議の精神にのっとり、私たち、すなわち住民・研究者・芸術家・政治家・学生・行政・NGO・企業・メディアなどさまざまな主体は積極的に世界湖沼会議に参加し、本会議・自主企画ワークショップ・自由会議・サイドプログラムなどにおける多彩な活動

を通じて議論を深めることができた。その中で提起されたものは、「生態系の仕組みを重視した湖沼の保全・管理」や「湖沼の保全・管理と文化・教育との関係」の重要性などである。

私たち第9回世界湖沼会議参加者は、会議の成果と反省を踏まえ、湖沼にかかわるすべての個人・組織が力を合わせ、以下の事項に重点をおいて行動することを決意し、ここに宣言する。

1. 湖沼にかかわるすべての個人・組織のパートナーシップの構築と充実
2. 情報の公開と共有、環境教育・環境学習の推進、人材の育成
3. 調査研究とモニタリングの推進
4. 統合的流域管理の推進
5. 国際協力の推進と連帯の確立
6. 資金調達に関する諸方式の検討

2001年11月16日 第9回世界湖沼会議

心理的距離を縮めるのは 文化の問題

「人と環境の関わりには三つの距離があります」と嘉田氏は言う。「物理的距離」、「社会的距離（意思決定を行う時に、どれだけ参加して関わる事ができるかという距離）」、「心理的距離」の三つだ。物理的距離が離れば、社会的距離も離れ、その結果心理的に不満が高まってくるのだ。例えば、膨大なコストをかけて上下水道が整備されても、社会的距離が離れ、心理的距離が離れば、その利用者は決して高い満足を感じない。心理的距離が離れるということは、無責任を生み、無力感を生む。そして、責任感をもちえなくなる。この無力感が現在の社会開発の考えに大きな影を落としており、それは社会として幸せな状態とは言えない。生きがい、自己実現など、分野により表現は異なるが、いわば「生きる力」を育むことが必要で、環境の問題を考えるにも、実は同じことが言えるという。

では、どうすればよいのだろうか。そのためには、心理的距離と社会的距離を近づける必要がある。水の問題で考えれば、確かに、人と水との物理的距離は一旦は離れてしまった。でも、社会的・心理的距離を縮めるための工夫は十分に可能。例えば、社会的距離を縮めるにはできるだけ多くの方に、意思決定の場面で広範な住民参加を行い、広く多様なパートナーシップでものごとを決めていくことが大事となる。つまり、いかに多くの社会的意思決定の機会に参加してもらうかがキーポイントとなる。

こつこつしたことを行いながら、心理的距

離を縮めることが必要だが、実はそれが「文化の問題」となる。「私だつてできる。私だからこそできる」という感覚。このように思えるためには、自分の暮らす地にアイデンティティをもってもらうことが必要だ。つまり、わたしの村、わたしの家、わたしの地域、がどのような場であるのかを確認しながら、愛着を育んでいかねばならない。それを左右するのが文化の問題ということなのだ。

一九九六年に大津で開かれた「古代湖会議」では、今まで生物と水だけで語られていた湖の問題に、「生物と文化の多様性」というテーマを持ち込んだ。CZPOでも文化の多様性が重要視されてきており、「今回の湖沼会議で琵琶湖が世界の中で独自性を出して行くには、生活と文化の《トータルな》多様性に焦点を当てることが大事と思った」と嘉田氏は言う。

この結果、今回、約九百あった国内外の発表応募で、一番多かったのは水質に関するもので約三百、その次が生態系で約百二十、その次が文化に関するものだった。例えば「湖の宗教的意味」や、「汚濁物を処理するための文化の問題」等の発表も見られた。さらに、全国各地の市民団体や行政などによる調査発表も数多く見られ、情報交換の役割も果たしていた。

水の文化を表現する

今回の国際会議で秀逸だったのは、「水の文化の表現」の場を設けたことだろう。たとえば、「水の文化を表現する」というワークショップでは、「水の文化学習実践レポート」(二ページ)でも紹介した「寸劇・淳史くんの溜池たんけん」や「創作

狂言・琵琶の湖」語り・五十年前の湖北の暮らしが母から学んだこと」「寸劇・みぞと水文化」が披露された。

創作狂言「琵琶の湖」は、琵琶湖の外來魚種をテーマにした演目だ。在來魚などに琵琶湖を追い出された外來種のブラツクバス、ブルーギルが故郷に戻る途中同じように外国を追われ日本に向かう途中の緋鯉に出会う。三者は、自分たちは自らの意思で異国に住んでいたわけではない、と人間の身勝手さを批判するという物語だ。これらプログラムは、海外からの参加者からの大きな拍手を送られた。

また、歌手の加藤登紀子氏(UNEP親善大使)は、琵琶湖に浮かぶ沖島の小学校生たちと約九ヶ月に渡る交流を行い、そこでの体験をもとに「生きてる琵琶湖」を作詞・作曲、滋賀県の小学校生約八十名と謳いあげた。と同時に、黒田征太郎といっしょに水を描く、など楽しいプログラムも多数設けられた。

何も研究発表だけが表現の手段ではない。狂言もあれば寸劇もあれば歌もあり語りもある。でもその基本には、住民による自らの調査があり、暮らしの問題意識がある。住民だからこそできる調査があり、住民だからこそできる愛着をもった表現というものがある。心理的距離を縮めるプログラムを目にできたことは大きな収穫だった。

会議の最後にまとめられた「琵琶湖宣言2001」は、湖沼環境改善への活動指針であるが、「水の文化」を意識した人々がいかに情報を交わし、活動を行い、人材を育成すべきかという、しくみづくりの宣言としても読むことができるだろう。



アジアの水辺から見えてくる水の文化

タイの首都バンコク トンブリー地区

アジアまち居住研究会



アジアの水の文化

アジアの都市を「水」からの視点で研究しはじめて、十五年の歳月が経つ。ちよと日本では、東京・芝浦の「インクスティック」や「タンゴ」といった運河沿いのカフェバーが話題となった頃だ。それを皮切りに、日本の各地で水辺を生かした町づくりが練り広げられる。あのウォーターフロント・ブームである。だがすぐに、水辺のガラスでピカピカの建物から人々の足は遠のき、過熱気味のブームもあつという間に終わった。

もつと自然な人と水との関わりによって生み出された生活様式や習慣を感じたい、知りたい。そつでなければ、本質的な水辺の再生はありえないと思つた。そんな時に出会つたのがアジアの水辺、とりわけ中国江南の蘇州とそ

の周辺の水の町である。そもそも、かつて日本やアジアの各地域では、欧米よりつと水が人々のくらしに密接に結び付き、豊かな生活文化を形作つていた。その文化の掘り起こしが今求められている。

そして今、興味の対象はタイのバンコクと、その河川流域の歴史的な都市へと移っている。一九九八年から毎年調査に出かけ、水を中心とした生活環境を都市・建築の視点から調査している。中国の江南地方と同じく、ここにもまた居住や生産には適さない湿地帯を開発して定住を可能にする、いわば水との闘いと共生の繰り返しという歴史がある。それを乗り越えることによつて実現したタイの水辺には、建物や人々の生活に欧米のような華やかさはないが、水と共生するくらし本来のあり方と人々のエネルギーシユな生活が

ある。タイや中国といったアジアの水辺から見えてくる水の文化とは、日本人が失い忘れてしまった、かつてのこつとした豊かな「水の文化」そのものなのかもしれない。

タイの水の文化を斬る！

この調査研究は、「ミツカン水の文化センター」研究事業として、二〇〇二年度から新たにスタートする。調査研究の目的は、水路、道路、宗教施設、住宅地・商業地といった都市構造と、民族、宗教、階層、職業といった社会構造を結び付けながら、水と密接に結びつく都市空間がいかに形作られ、成り立っているのかを歴史的に明らかにすることにあり、民族や階層といった社会構造の違いは、水路や宗教施設、住宅地などからなる都市構造にそのま

ま反映される。また、住宅や店舗などの建物は、その場所の様々な条件に応じて多様なタイプを生み出している。それら相互の關係に着目し、水の文化の背景を具体的に探ることが目標となる。

とりわけ、タイを見る上で欠かせない二つの視点がある。

一つは、水辺の環境づくりから、タイ人と住まいの変遷を考えることである。この調査研究では、バンコクが主な対象となるものの、水との関わりの中で、多種多様な民族がいかにタイ人へと同化し、それによつて住宅のスタイルがどのように変遷したのかを解き明かしていきたい。そのためには、スコータイやアユタヤも調査研究の視野に入れる必要がある。そもそもタイでは、モン族、タイ族、クメール族（カンボジア人）、漢族（中国人）、またマ

レー人やインド人、ポルトガル人など民族も宗教も異なる人々が支配あるいは共存してきたという歴史がある。

つまり、都市部のみならず、様々な地域で幾重にも積み重なる文化層が築きあげられた。その時代と地域の変遷のなかで、彼らの一部は高床を共通としながらも、住まいのあり方をその場の環境に応じて変化させている。したがって、水を中心とした環境形成を探りながら、どのように人々がその地に根付き、住まいを作り上げていったかを建築的に考察し、同時に地理学的な視点をも含めながら考えていきたい。

このことは、水を中心としながら大都市における多種共生をいかに実現するか、そのためのプロセスとはいかなるものかといった今日の問題への解決にも結び付く。

二つ目の視点は、水辺に展開するまちのくらしと信仰の関係を探ることである。タイでは、水の側に顔を向ける仏教、道教、ヒンズー、イスラムなどの寺院を中心として、それぞれが個々に集落やコミュニティをつくりだしている。とくに、タイの仏教寺院は、単なる信仰の場ではなく、修行や儀式、祭礼、墓地、また学校としても機能することが多く、まちの中心としての役割を果たす。それらが水辺に点在する様子は、まさにタイを代表する都市景観といえよう。実は、水辺には小さな祠も数多く点在し、水と信仰、人々のくらしがあらゆる部分で深く結び付く。

バンコクのタイ人

一般にタイ人と呼ばれる人々は必ずしもタイ民族ではない。華人系、マレー系、インド系、クメール系などのタイ人も少なからずいるからである。しかも、現在ではそれぞれを明確に区別できない。それほど混血が進んでいる。そもそも、トンブリー王朝の創始者であるタークシン王その人自身が、中国人との混血であった。そのうえ、個々の宗教が自立していも、祭事の内容さえも混合が進んでいるから、ますます複雑だ。つまり、文化も融合しているのである。

とくに、都市部ではその傾向が強い。バンコクでは、人口600万のうち半数以上が華人あるいは華人との混血であるといわれている。チャイナタウンやインドタウンには、外見から中国人やインド人とすぐに見分けがつく人々が集中している。だからと言って、それ以外の場所では、すべて仏教を信仰するタイ族ということにはならないのである。実際、われわれが調査を行ったサンタクルース教会地区には多くの華人系キリスト教信徒が存在し、仏教寺院のあるイーカン地区では中国の神棚を数多く見かけた。ひとつの家に、上座仏教の仏像と中国の財神が並んで祭られることも少なくない。夫と妻で民族の系統が異なるからだという。その点、ムスリムは、地区、家族ともにイスラム信者としての統一感が強い。それでも、ひげを伸ばしたり、白い帽子をかぶっているわけではないから、外見は他とあまり変わらない。

こうしたタイの都市を対象に、民族や宗教からなる社会構造をひも解きつつ、いかに水との関係をとりながら建物を築き豊かな暮らしを作り上げてきたかを探ることは、複雑ではあっても実にエキサイティングな作業である。



水路が埋め立てられた場所さえ、残された寺院や祠が住民たちやまちの空間に記憶としての水を蘇らせる。まちや建物の空間の把握をベースとしながら、このような民俗学的な視点をもって考察を深めることが、タイの水の文化を知る重要な視点となるはずだ。

こうして、タイの水の文化を掘り起こすことで、「新しい人と水とのつきあい方」を見つけていきたい。まずは、本調査がスタートする前のプレ調査として、二〇〇一年夏に実施したバンコク・チャオプラヤー川西岸のトンブリー地区の報告をおこなう。この調査は、バンコク都市研究の第一人者であるチユラロンコン大学スワタナ・タダニエイ助教とその研究室との協同ですすめられた。

トンブリー地区には、アユタヤ滅亡後、十八世紀後半にわずか十五年だけ王朝が置かれた。その後、首都は東岸の現在のバンコク中心部に遷都し、トンブリー地区は見捨てられたかのように考えられがちである。だが、遷都後も、ここでは水の都市ならではの町づくりが行われ、道路を中心とした近代化の時代にあっても、むしろ水との関わりを積極的に推し進めている。水辺に様々な民族が共生し、それぞれに個性的な住まいを持ち、また信仰の場としての寺院や祠が多いトンブリーは、今後の調査研究を進めるうえで、まず最初のフィールドとして最もふさわしい地区なのである。

トンブリーの空間構造

わずか十五年という期間ではあったが、トンブリー王朝時代は、この地区のその後の性格を決定付けた。

後に成立するラタナコシン王朝は、王宮を中心に三本の運河を環状に建設し、同時に内陸に向かう道路を通して都市域を面的に広げていく。

それに対して、建都から二十世紀半ばまでのトンブリーは、チャオブラヤー川やヤーイ運河などの水辺に沿って発展を遂げるのである。

トンブリー発祥の地は、ヤーイ運河とチャオブラヤー川という二本の幹線運河が交わる古くから交通の要衝にある。一七六七年、ここにビルマ軍を掃討した武將タクシンが王宮を建設する。それがトンブリー王朝のはじまりであった。それより前のアユタヤ時代には防衛のための砦があり、ヤーイ運河を挟んだ南側にはポルトガル人傭兵部隊の集落が存在したことがわかっている。

王宮が建設されたといっても、今のラタナコシン王宮のように壮麗なものではなかったであろう。現在、海軍が使用する王宮の跡地には、当時の遺構として中国風の装飾を持った小振りの建物があるにすぎない。「旧王宮地区」ともいえるべきこの地区は、東のチャオブラヤー川、南のヤーイ運河、北のノーイ運河に囲まれてい

る。その中央には、モーン運河が東西に貫き、トンブリーの主要な運河が集まる。

そもそも、チャオブラヤー川は幾度も人工的にシヨートカットが開削され、流路を変えてきた。旧王宮地区の部分も一五四二年に新たに作られたものである。トンブリー王朝以来、そのチャオブラヤー川に沿って、水に顔を向けるように寺院などの国家級の大規模施設が置かれた。これらの施設の西側には、小さな運河に沿って、店舗やそこに従事する人々の住宅がつくられている。いずれも運河に沿いながら、地区全体にわたって表のパブリックと裏のプライベートを整然と分けているのだ。こうした合理的な空間構造は、旧王宮地区に特徴的に見られる。

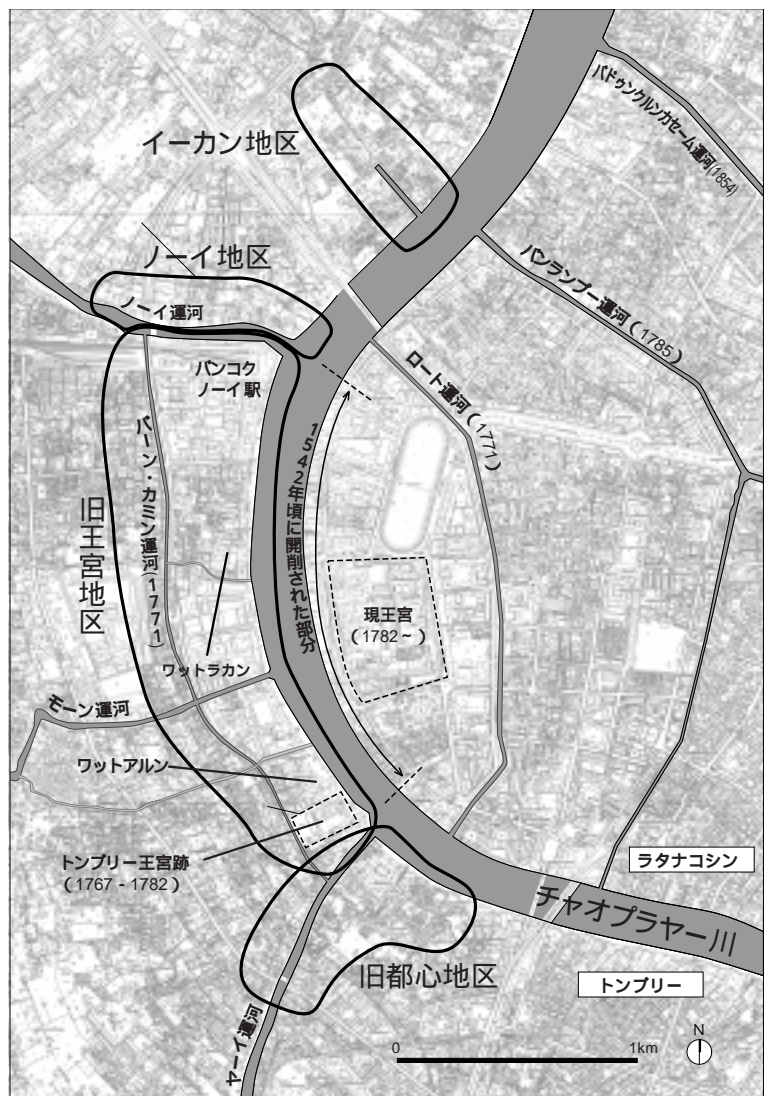
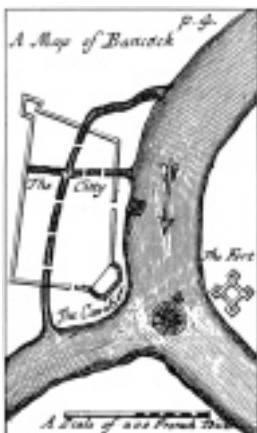
旧王宮地区の南側には、ヤーイ運河に沿って、多種多様な民族、宗教、職業、階層からなる人々が集合して住んでいる。王宮の建設には、アユタヤから様々な職能集団が呼び寄せられた。もともと住んでいたポルトガル人の末裔のほか、中国人、ムスリムなどが集まり、それぞれ独自のまちをつくりあげている。変化に富む密度の高いこの地区こそ、まさに「旧都心地区」として、トンブリーの軌跡を象徴している。一方、北のノーイ運河沿いは、外洋船が小船に荷を積み替えるための港として機能した。現在でも所々に水上の高床倉庫が残っている。十九世紀末には、対岸の旧王宮地区

チャオブラヤー川を挟んで
西側がトンブリー
東側がラタナコシン

1932年のバンコク



現在のチャオブラヤー川とヤーイ運河が交わる部分を描いたもの。王宮建設以前の1557年頃にはここに城砦が置かれる。その後、図のような城砦都市が建設された。260m x 480mほどの規模で、アユタヤ滅亡後、1767年トンブリー王宮がここに置かれる。Simon de La Loubère, "A new Historical Relation of the Kingdom of Siam. S.p.Gen." London, 1693 より





左側にバンコクノイ駅が見える。タイに鉄道が開業したのは1893年。タイ南部への鉄道の起点で、右側がノイ運河との合流地点。近代の花形であった鉄道も、開業当初は水運と無関係には成立しえなかった。



ノイ地区の倉庫。チャオプラヤー川をさかのぼってくる外洋船や、鉄道で運ばれてくる南タイの魚介類や果実が、ここで小舟に積みかえられ運ばれていった。



ノイ地区



上：ノイ地区屋根伏図。かつては対岸の駅と結びついた物流の拠点であった。倉庫群は水中に杭を打つ高床でつくられ、水上と陸上の両性的な性格を持つ。倉庫群を含め、家屋や道の下は水面や低湿地であるため、水際線は雨季と乾季では全く異なり、一定しない。

左：1932年の地図では、ちょうど倉庫の並ぶ部分が浮島のように描かれている。

側には鉄道の駅がつけられた。このノイ地区こそ、東のラタナコシンを含めた大バンコクの流通拠点として機能したのである。

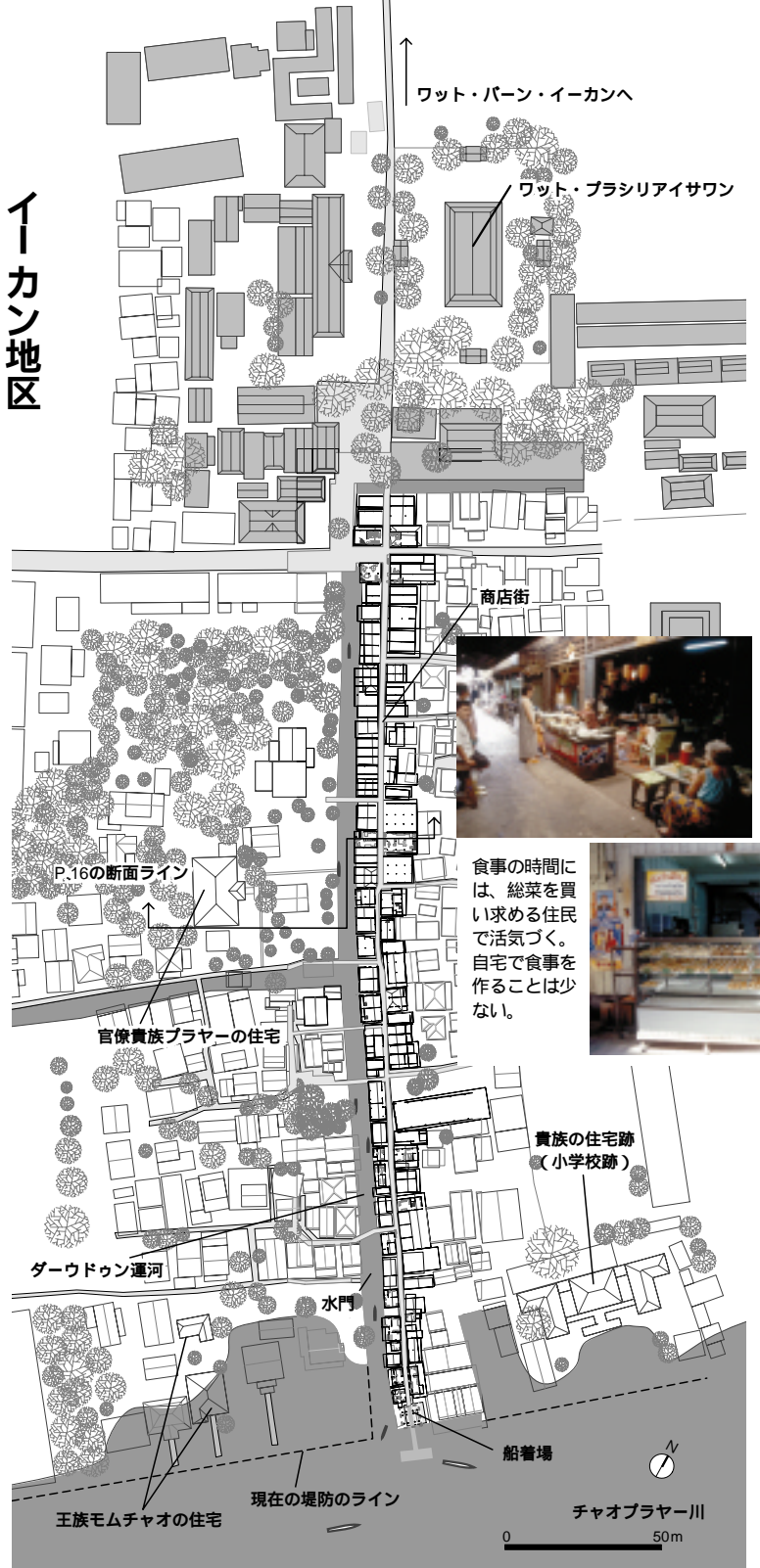
ノイ地区の北には、水を中心としたトンブリの空間構造の原理を知るのに欠かせない場所がある。我々が「イーカン地区」と名付けたその場所は、チャオプラヤー川から寺院へと続く支線運河に沿って発達した。運河と平行に走る参道には二列の店舗群が軒を連ね、反対側の土地には官僚貴族の住宅が点在している。まさに水と共にくらすための典型的な構造がここにはある。しかも、チャオプラヤー川沿いには、あたかもヴェネツィアのパラッツォを見るかのように、王族の住宅が川の側に顔を向けて立地しているのだ。

現王宮のあるラタナコシン側に対して、一握りに語られることが多いトンブリだが、丁寧に見ていくと実に多様な性格を持っていることがわかる。

十九世紀中頃から、ラタナコシン側は劇的な近代化を経験し、陸上都市として変貌する。それに対し、トンブリでは水上都市としての性格を強く持ちながら緩やかに成長していく。

では、「イーカン地区」、「旧都心地区」、「旧王宮地区」をより具体的に見ていこう。これらの地区は、いずれも水と共に生きるトンブリを総合的に理解するのに欠かせないものばかりである。

イーカン地区



ワット・バーン・イーカンへ

ワット・プラシリアイサワン

商店街



食事の時間には、総菜を買い求める住民で活気づく。自宅ですごすことは少ない。

P.16の断面ライン

官僚貴族プラヤーの住宅

貴族の住宅跡
(小学校跡)

ダーウダウン運河

水門

船着場

現在の堤防のライン

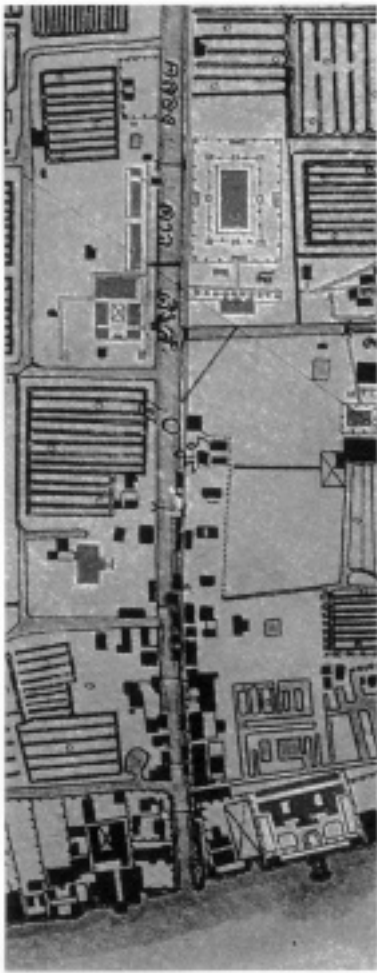
王族モムチャオの住宅

チャオ普拉ヤー川

0

50m

現王宮から北へチャオ普拉ヤー川を上り、ノイー運河を左手に見て、ピンクラオ橋をくぐると、左岸に我々が目指すイーカン地区がある。この地区の南側は、小説『メナムの残照』の舞台となった場所でもある。主人公アンスマリンの生家は、チャオ普拉ヤー川に面し、水と密接に結びつく当時の生活が生きて描かれている。川をもう少し上れば、国営工場地区が見えてくる。なかでもイーカン酒造工場は、ラーマー一世期からの政府酒造工場として有名だ。お馴染みのメコン・ウイスキーはここでつくられている。



イーカン地区 現況図(右)と1932年の地図(左)を比べると、チャオ普拉ヤー川側から寺院に向かって店舗が増え、また内陸の上岸から運河側の下岸に向かって店舗がつけられていったことが読みとれる。

イーカン地区

運河沿いに発達する門前町

イーカン地区でまず目に付くのは、チャオ普拉ヤー川に立つ煌びやかな船着き場兼休憩所(サーラー・ター・ナム)だ。それが水上の人々に対して、この地区のなかに寺院があることを象徴的に示している。ここで船を下り、三〇〇メートルほど歩くと、地区の代名詞であるワット・バーン・イーカンにたどり着く。タイ寺院の立地の特徴を考えると、チャオ普拉ヤー川など幹線運河沿いの自然堤防に面するものと、比較的安定した内陸の土地に運河を引き込み建設されたものの二つに分けることができる。この地区の寺院は後者である。内陸にある寺院へのアプローチのために、チャオ普拉ヤー川からダーウダウンと呼ばれる運河が引き込まれている。

その運河に沿って商店街が形成されている。運河と平行に幅一メートルほどの参道が通り、その両側に店舗が立ち並び、そのうち片側一方の店舗群が裏で運河に接するというわけだ。一九三三年の地図をみると、チャオ普拉ヤー川沿いの船着き場、参道、店舗らしき建物がすでに描かれている。

ここでは、中国江南の例にならない、運河沿いの建物が並ぶ所を「下岸」、道を挟み内陸に建物が並ぶ所を「上岸」と呼ぶことにする。下岸には、間口が

狭く、奥行きがわずかに六メートルほどの店舗が規則的に並び、上岸には、間口が広く、奥行きも深く、不揃いな店舗が並んでいる。それぞれ参道を正面とし、短冊状の敷地が展開している。

下岸と上岸の構造を持つ商業地は、トンブリーでも広く見られ、また、かつてのバンコク最大の商業地であったチャイナタウンでも同様の構造が見られる。この種の商業地は、チャオプラヤー川などの幹線運河に直接面せず、そこから内陸に運河を引き込んだ場所に立地するという大きな特徴をもつ。多くの運河を確保しつつ、水辺という限られたなかでの土地の有効利用を実現しているのだ。運河の埋め立てや水門の建設による舟運の衰退は、水辺の市場（タラート・リム・ナム）や水上市場（タラート・ナム）といった従来の空間を破壊した。そのなかで、陸と水の空間が密接に結び付くこうした商業地の多くが、今もその姿を残していることは興味深い。

さて、イーカン地区の商店街では、揃わない日用品がないというくらい雑貨屋、食堂、菓子屋に八百屋、床屋、電化製品の修理屋までもが店を構えている。多くの店舗は、狭い間口いっぱいには商売ができるよう一階部分に壁をもたない。参道の幅員が狭くても、通りと店舗が一体となり、買い物するにはちょうどよい空間をつくりだしている。

実は、トンブリーやバンコクの水辺に見る幅員二メートルほどのコンクリートの通りは、もともとターン・チュアムと呼ばれる木製のデッキである可能性が高い。イーカン地区もまた、かつては木製の歩道であり、その下まで水が来ていたという。従来、運河沿いに堤防はなく、水上にそのまま高床式の建物を建て、店舗を営んでいた。

ところで、下岸と上岸は、どちらが先につくられたのだろうか。あるいは一体開発なのか。聞き取りをすると、下岸と上岸の両方の店舗を所有する人が多いことに気付く。その場合、下岸を人に貸し、本人は上岸で店を営む。ときには、下岸と上岸の両方で店を出す場合もある。間口や奥行き規模、さらには商売や居住環境を考えれば上岸が優位であるはずだ。五十年ほど前、中国潮州から来た父親が上岸に店舗を建設し、その後、下岸にも店舗をつくったという住民もいる。一九三二年の地図を見ると、下岸の店舗は運河に迫り出しており、上岸に対し戸数も少ないことが確認できる。この商店街は、上岸から下岸、つまり内陸側から水際へと発展したのであろう。といつてもバンコクの水辺は、陸と水の境界が実に曖昧だ。王宮周辺を巡る運河など、一部の限られた場所を除き、護岸整備が行われるのは一九六〇年代以降のことである。それゆえ、建物が水際を作り出すと言ったほうがふさわしいかもしれない。



商店街と裏の住宅地 下岸は上岸に比べ間口が狭く奥行きも浅い。その反対側には、水際から離れた場所に官僚貴族の住宅がつけられる。



ダーウダウン運河 護岸が建設される以前は、建物の下も水面であった。現在でも船から下岸の店舗に、直接荷揚げしている場面に出会うことがある。

右上：運河沿いに発達する門前町の表玄関である船着場は、近所の人が集まる憩いの場ともなっている。蒸し暑いバンコクでは、水辺に開かれたベンチが心地よい。現在は鉄製の浮き桟橋が付け加えられている。

右下：堤防ができて以来、水門によって水位がコントロールされているが、小舟が入ってくることも珍しくない。





チャオプラヤー川沿いの貴族住宅
戦後は小学校として転用されたが、現在は廃屋となっている。

イーカン地区 チャオプラヤー川沿いの王族住宅

イーカン地区において、商店街が庶民であるのに対し、チャオプラヤー川に面する住宅群は、まるで、そこに住む人々の富や権力を示すかのような象徴的な空間である。最初に目を引くのは、パラディオ様式を思わせるような空間構成、アーチ窓や美しいモルディングなどの装飾を持つ洋風煉瓦造の建物である。もともと十九世紀末に建設された官僚貴族の住宅で、ラーマ五世の相談役やかつてのトンブリー県知事を輩出した名家である。戦後は、その建築と敷地規模の大きさをかわれ、小学校へと転用された。その並びには、短冊状にほぼ同じ規模の屋敷地が続く。そこには、木造の美しい破風飾りなどを持つ住宅が水辺を飾る。

住宅のなかには、モムチャオ（王の孫の官位）と呼ばれるラーマ四世の孫が住んでいた建物もある。幹線運河に面し、階層の高い人々が居を構えるという事例は、バンコクの別の地域でも見られ、ヴェネツィアやアムステルダム、蘇州なども共通した特徴である。しかし、それら世界の水の都と大きく異なる点が一つある。バンコクでは、水際から直接立ち上がる高級住宅がほとんどなく、少し後退した敷地の内陸側につくられている。一般に、チャオプラヤー川沿いや幹線運河沿いは、水による土地の浸食の影響を直接受け

高床式住居

地面から高さ二、三メートルに床を張る住宅を一般的に高床式住居と呼ぶ。タイの伝統的な住宅を代表するこのタイプは、紀元前より、日本から東南アジアにかけて広く分布し、古代アジアに共通した住居形式であることが、最近の発掘調査などから明らかになりつつある。そもそも、日本では鉄製工具の発生によって、ほぞ穴の作成が容易になったことから、弥生時代に現れた住居形式と考えられてきた。奈良から出土した四世紀頃の家屋文鏡と呼ばれる銅鏡にも高床式住居が描かれている。しかし、近年、中国江南地方において、紀元前5000年のほぞ穴を持つ高床式住居と推察される遺構が発掘され、日本における発現もより古くにさかのぼる可能性が出てきた。高床式住居の発生には、人間や穀物の獣からの防衛、水上や水郷地帯における杭打ちによる建築形式など、様々な要因が考えられている。とくに、水郷地帯によく見られることから、稲作文化と関連付けられて説明されることが多い。しかしながら、タイや中国南部の山岳地帯でも、最も典型的な住居形式であり、水郷地帯に特有なものとは限らない。江南の民族がタイ付近まで南下し、同じ住居を作ったという説もある。高床式住居について、その地の自然環境と住居形式の伝播の関係を歴史的に解き明かすことは容易ではないが、タイを対象に水との結びつきを考えながら、工法まで含めた住居の変遷を探ることも欠かせない作業である。

る不安定な土地である。それにもかかわらず、このチャオプラヤー川に面する王族や貴族の住宅群は、水に迫り出すようにつくられた。彼らが自らの権威と象徴性を重視して、住宅地を選択していることは実に興味深い。そして、かつてチャオプラヤー川沿いには、もう一つの大きな特徴を持つ住居形式が存在した。筏の上に建物を乗せ、水中に打ち込んだ杭に固定する浮き家（ルア・ペー）である。十九世紀中頃から二〇世紀初頭にかけての外国人旅行記には、その浮き家がよく描かれており、所有者は裕福な中国商人であったことが知られている。つまり、チャオプラヤー川沿いに居を構えるこ



浮き家（アユタヤ）19世紀中頃の記録では、バンコク住民の多くが水上に住んでいたといわれている。Karl Döhring, Land und Volk, 1923, より



高床式住居の床下は、日本の縁側のようにくつろいだスペースとなっている。このような住宅では、就寝時以外に個別部屋を使うことはあまりない。



右：下図の、初めてできた住宅。建築当時は水に面していた。左：水溜 川沿いにカミノリ堤防ができたため、内側にはこのような水溜まりが取り残された。



と自体が大きくなステイタスシンボルとなっていたのだ。

この段階の屋敷地の立地には運河との関係において、もう一つのタイプが見いだせる。幹線運河から引き込んだ支線運河沿いのより閑静な場所、同時に安定した土地に屋敷を構えるものである。このタイプは幹線運河沿いの敷地を並べ、間口を小さく割ることがなく広大な敷地を持つ。水に対する象徴性より、土地の安定、閑静な環境、広大な屋敷地を求めた結果だ。敷地が大きいため、時代とともに子弟の住宅が増築され、屋敷地は血縁関係を持つ一つのコミュニティを作り出す。

そうした住宅の中でも、とくに目を引く煉瓦造の住宅は、プラーヤという官位を持つ官僚貴族の住宅であり、六〇年ほど前に土地と家屋を買い移り住

んだ。しかし、その前は、王族の土地であったという。付近一帯もまた、かつては王族の所有であった。

このプラーヤの住宅を一九三二年の地図で確認すると、住宅の裏側にも小さな運河が描かれている。この運河は敷地を示し、裏には広大な果樹園が広がっていた。イーカン地区はランプータンの産地としても知られている。かつて家主は住宅前の船着場から船に乗りチャオプラーヤ川を渡って、対岸の役所に通っていた。子供たちの登校も船を使っていたという。

プラーヤの住宅は、モールディングや付け柱といった近代住宅に特徴的な装飾がなく、いたってシンプルだ。インターナショナル・スタイルの影響を受けた一九二〇年から三〇年代の建設である。そのうえ、バンコクの住宅の多くが、洪水や高温多湿な気候風土に対応するため、一階の床を高くし、階段を設けてアプローチさせる高床式であるのに対し、この住宅は基礎の上に直に一階の床をつくる。それだけ、この土地は安定していたことを示す。

だが、住宅周辺を見ると、やはり土地の水はけの悪さが目に付く。住宅の正面には、二階に上る外階段が設けられ

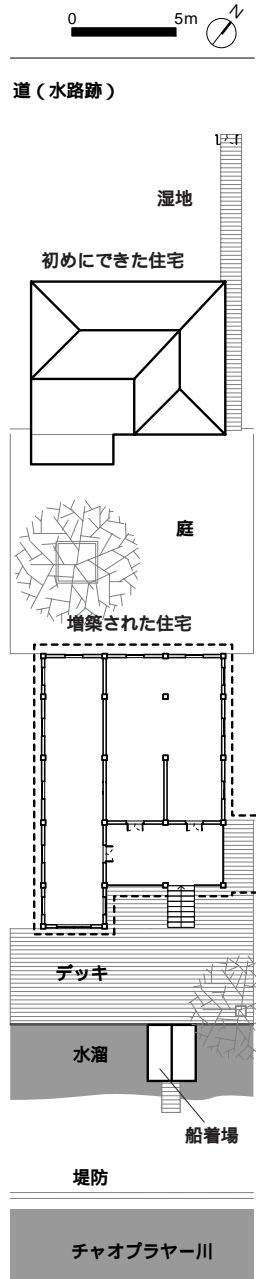
ており、それがメインの入り口だった。二階に寝室や居間などの主要な生活空間を置き、一階には、バス・トイレといった水回りなどのサービス空間を配置している。したがって、住み方としては高床式住居に近いのだ。しかも、その後、敷地内に増築された一つが、木造の高床式住居であるのは実に面白い。やはり、それがバンコクの気候風土にあった最も快適なものなのだろう。

バンコクは一般的に商業地、住宅地といった区別があまりなく、都市が計画的でないといわれている。しかし、こうして都市構造と社会構造から分析すると、そこには近代都市計画とは違う、水と密接に結びつくその土地独自の都市建設の理念が明確に読み取れるのである。

イーカン地区
内陸側の閑静な住宅地

チャオプラーヤ川沿いや幹線運河沿いは、土地が不安定であるにもかかわらず、王侯貴族は、むしろ水辺の象徴性を重視して居を構えた。

右図チャオプラーヤ川よりみる増築された建物。手前の小屋はプライベートの船着場だった。



王族モンチャオの住宅とともに高床式住居で、内陸側の住宅から水際の住宅の床下(1階)を通り抜けて、チャオプラーヤ川に出ることができる。

旧都心地区

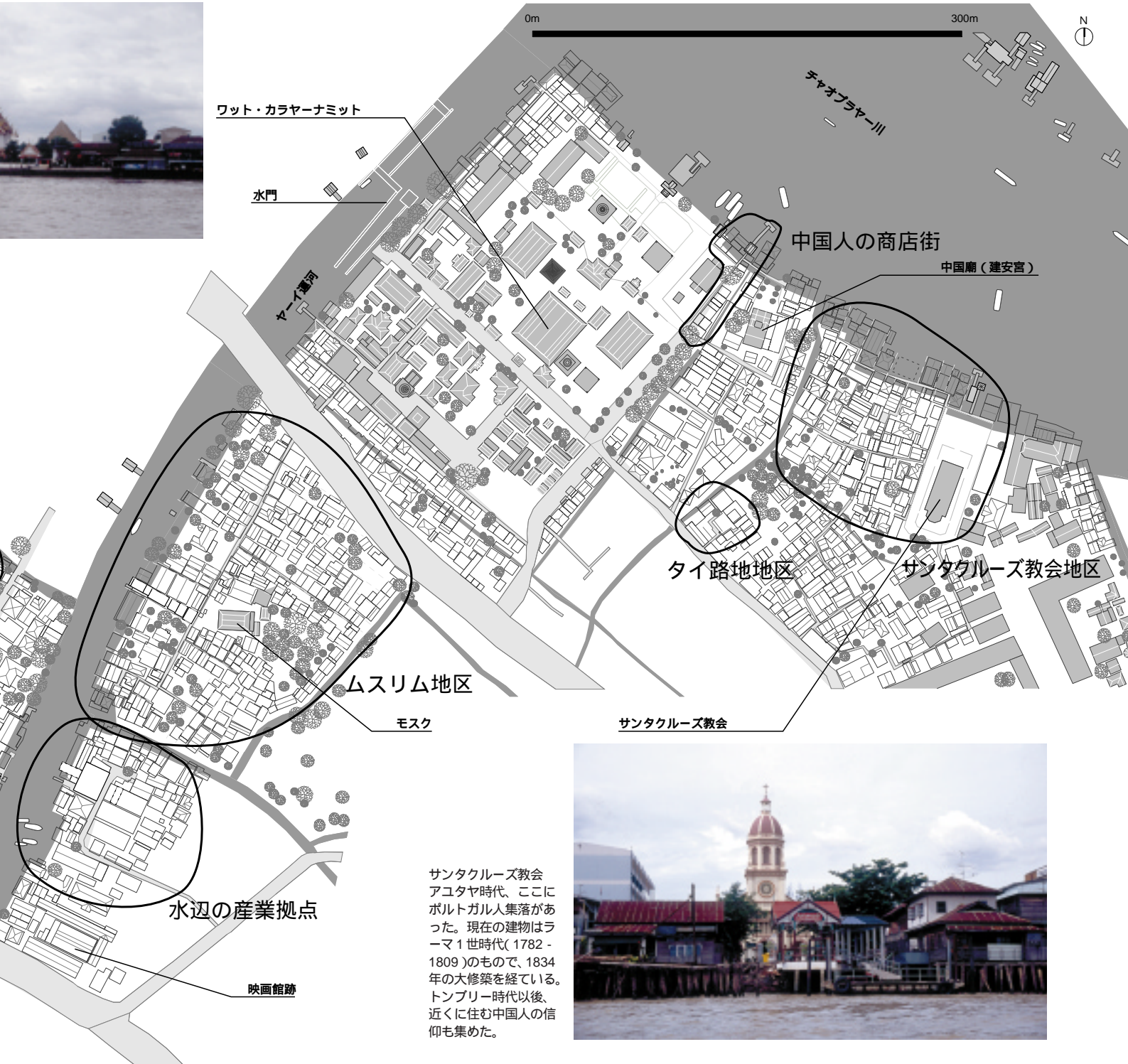
この地区には、ほぼ一キロ四方に様々な民族がそれぞれに集合して住んでいる。

ポルトガル人集落を起源に持つ「サンタクルース教会地区」、中国廟とワット・カラヤーナミットにはさまれた「中国人の商店街」、狭い路地に祠が点在する「タイ路地地区」、運河を引き込んだ「貴族の屋敷地」、舟運と強く結びつく「水辺の産業拠点」、寺院の参道と橋を中心に形成された「橋詰め市場」の七つの小さな地区がらなる。

旧都心地区 宗教施設の立地の特徴

まず、宗教施設に注目すると、各地区共通の特徴として、ムスリム、キリスト教徒、中国人、タイ人のそれぞれが寺院を核として地区を形成していることがわかる。また、宗教施設は、一九三二年の構造別に色分けされた地図を見ると、煉瓦や石の本堂が水際から一定の距離を持って建っている。これは、重量のある建造物が、より安定した地盤を必要としたためであろう。

また、教会、廟、寺院は、それぞれ建物の軸を運河と垂直にとり、ファサードを水に開いて水からの視線を意識



サンタクルース教会
アユタヤ時代、ここにポルトガル人集落があった。現在の建物はラーマ1世時代(1782-1809)のもので、1834年の大修築を経ている。トンブリー時代以後、近くに住む中国人の信仰も集めた。



した象徴的な構成をとる。それに対し、モスクはメッカの方角である西を向き、水路に対して閉じた構成を持つ。屋根の一部を除いて水辺からその姿を確認することができないのは、信仰と水との関わり方の違いを示している。では、各地区がどのような空間構造を持っているのか見ていこう。

旧都心地区

サンタクルーズ教会地区

サンタクルーズ教会地区では、主要な通りがチャオプラヤー川と平行に教会の脇から延びている。この道に面して、店舗や地区長の家が立地する。この通りからは、教会の塔を突き当たり見ることができ、街路空間の象徴性が高められている。

かつてチャオプラヤー川沿いの道には、煉瓦造の屋敷が川に正面を向けて建っていた。最も象徴的な外観を持つ住宅が水に向かって並ぶ時期があったのだ。

一方、地区の西側は少し異なっている。西側の運河に沿って並ぶ家々は、チャオプラヤー川ではなく、運河に向かう東西の方向性を持っている。教会側と比べて水との関係の違いを読みとることができる。さらに興味深いことに、同じ高床でありながら、伝統的なタイ住宅が水路側にデッキを持つのに対し、西洋風の装飾を持つ住宅は陸側にデッキを設けている。



ワット・カラヤーナミット
ワットは寺院を意味する。バンコクでも最大級の寺院で華人系タイ人の信仰があつた。1824年に建立された。つまり、トンブリー王朝時代にはまだ存在していなかった。

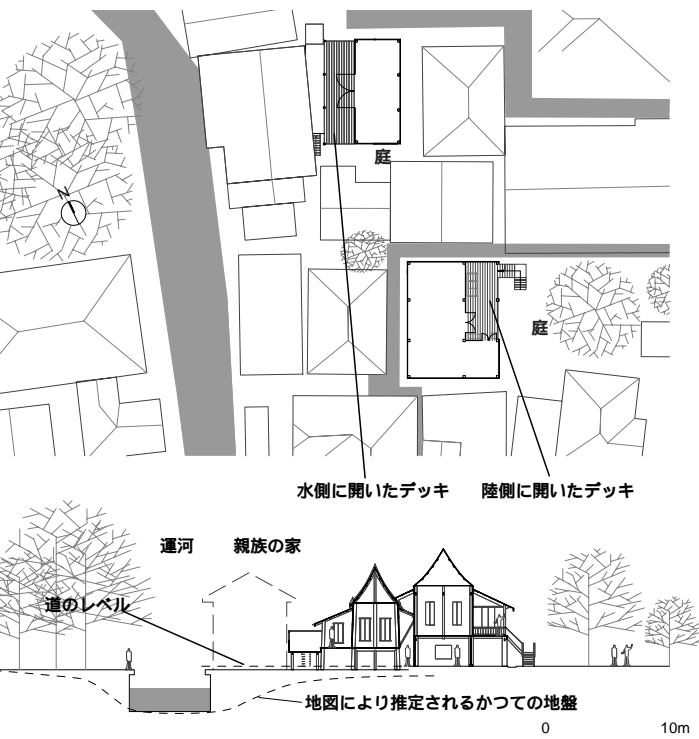
上：サンタクルーズ地区の現況図（右）と1932年の地図。教会側と西の運河側では異なった軸を持っていることがわかる。チャオプラヤー川沿いには煉瓦造の屋敷があつた。この地区を含む一帯はクディチン（クディは土地、チンは中国人を意味する）と呼ばれ、ポルトガル人が伝えたと思われるカステラのようなお菓子の発祥の地であり、そのまま名前にもなっている。
下：サンタクルーズ地区の西側。西洋風の装飾を持ち、床下の柱を煉瓦とモルタルで覆った住宅は陸側にデッキを向け庭をとっている（右）。一方、伝統的な高床住宅は水路にデッキを向けている（左）。建築年代は同時期だが、水に対する意識の差が正反対の構成を生んだ。



街路のアイストップにみえるサンタクルーズ教会



伝統的な高床式住居。軒の下は簡易な接客の場となっている。住人はクリスチャンである。



旧都心地区 中国人の商店街

中国廟とタイ寺院の間に位置する中国人の商店街では、チャオプラヤー川の船着場から垂直に道路が延び、そこに商店街が形成されている。ここでもイーカン地区と同様に、店舗の裏に運河が走り、舟運と商店街に密接な結びつきがあったことを物語

っている。
 実際、この運河は一九七〇年代までは船が入ってきており、表の道で商いをし、裏の運河から商品運び入れていた。店舗の空間もそれに応じて、一階を商売とサービスにあて、二階を寝室に利用している。中国廟へは、水の側からしかアクセスできないことも、この地区の水との強い結びつきを示すものであろう。

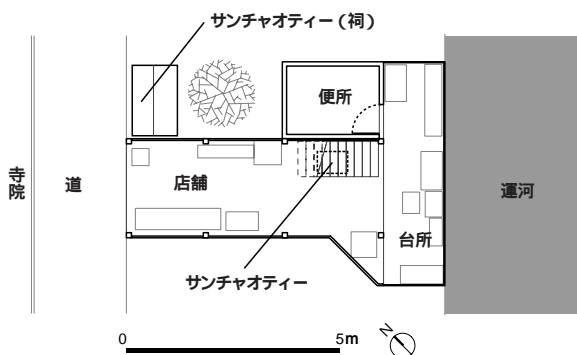
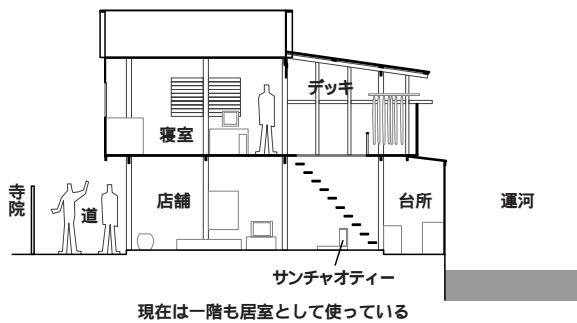


上：中国人の商店街 1932年
 左：現況図
 ワット・カラヤーナミットと中国廟に挟まれた場所に商店街が形成された。船着き場は、渡し船でチャオプラヤー川対岸の市場と結ばれている。
 下：中国廟（建安宮） トンブリー遷都と一緒に中国人が移住したのはこの周辺である。チャオプラヤー川に面するが、現在堤防が建設中である。



中国人の商店

通り側の間口は狭いが運河側は大胆に増築され、室内化されている。運河の幅は、1932年の地図からもわかるように3分の1ほどに縮小された。すぐ隣は中国の祠があり、運河側には便所が増築されている。バンコクでは隙間はあつという間に埋まってしまう。

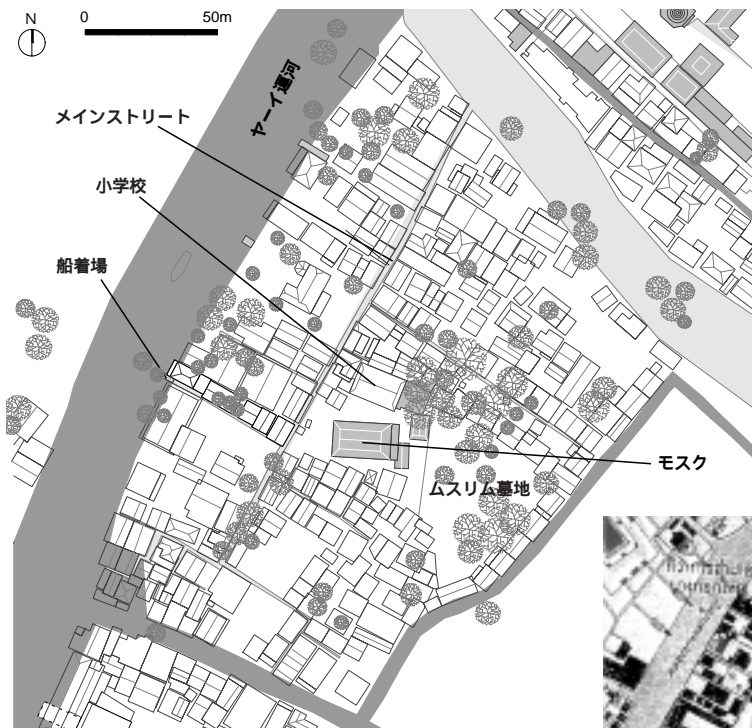


商店街 船着き場に降りて左に入ると中国廟、右に入ればワット・カラヤーナミットに至る。



雜貨屋
 間口いっぱい並べられた商品。その奥に運河に面した出入口が見える。

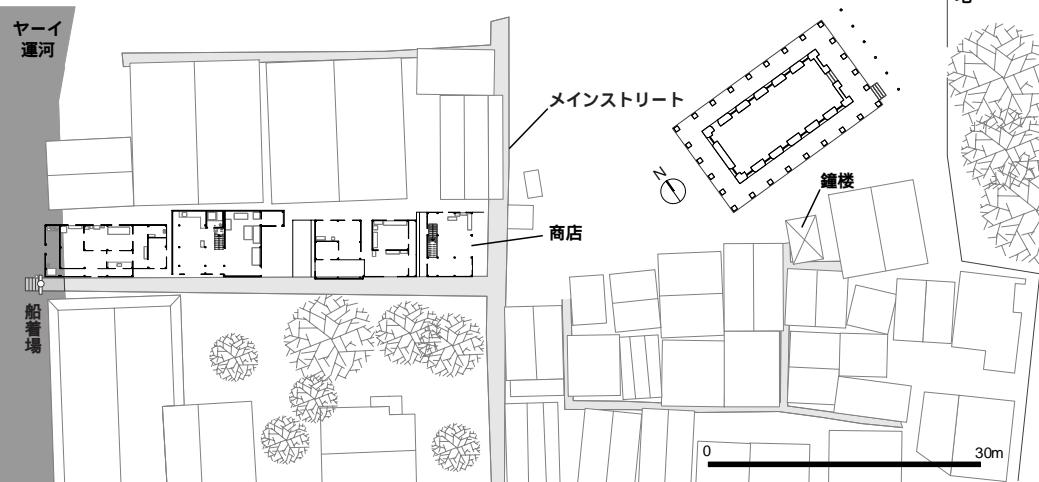
アジアの水辺から見えてくる水の文化



上：ムスリム地区 現況図
右：ムスリム地区 1932年



下：モスクと船着場
モスクは常に西を向いて建つ。ムスリムの住宅は、店舗に限らず、街路と居室が近いことが特徴である。



旧都心地区 **ムスリム地区**

一方、ムスリム地区では、ヤーイ運河と平行して走るモスク前のメインストリートを中心とし、そこから両側に路地が延びてそれぞれの家にアクセスする。同じような位置にメインストリートをもつサンタクルース地区と比べると、通りから徐々にモスクが見えるわけではなく、連続的な空間の象徴性は意識されていない。むしろ、狭く暗い通りを抜けると突然ファサードを現し、内と外とのコントラストを印象づ

ける。モスクと同様、地区レベルの構造を見て水との関係は弱い。他の地区が水辺の船着場を起点とした強い軸線を持つのに対し、ここでは水の方向への軸を感じることは少ない。船着場は、細い路地の奥にひっそりと置かれている。そして、唯一ここが地区の水との接点となる。



モスク バンコクの他のモスクと違い寺院風の外観を持つ。

ヤーイ運河に面した船着場の棧橋。ゲートに載る球形のドームがモスクの存在を伝える。



街路はいつも人で賑わっている。写真はモスク前の店舗。この道もかつては木製のデッキだった。そのため、現在でも下は空洞だ。



旧都心地区 タイ路地地区

さて、タイ寺院を信仰する、いわゆるタイ人はどのような暮らしをしていたのだろうか。中国人やムスリムが都市的に集住するのに対し、彼らは密度の高い旧都心地区にあつて、多民族の間に、比較的大きな敷地を並べて家を建てた。間とは言っても、もちろん一九六〇年代までは、舟運が唯一の交通手段であつたトンブリーにあつて、水との関係を持たずに住宅は立地できない。彼らは、農村部と同じように、運河に面したところに高床の家を建てて生活し

ているのだ。

タイ路地地区で特徴的なのは、サンパブーンと呼ばれる祠が路地に多く見られることである。これらはしばしば大樹の根本に置かれる。それぞれの路地は、親族の住宅が取り囲み、独特で親密な雰囲気をつくりだしている。

この地区の住宅の内部には、立派な仏壇が置かれ、いずれも東を向いている。日本の大黒柱信仰によく似て、住宅の棟を支える柱も祀られる。このように、多様な信仰空間を内部に抱え、緑の多い路地と庭を積極的に利用した空間を持つのが、タイ人の生活空間といえるだろう。

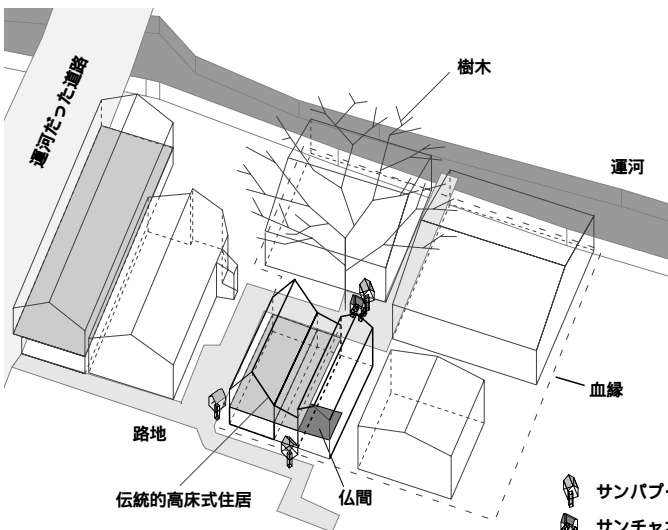
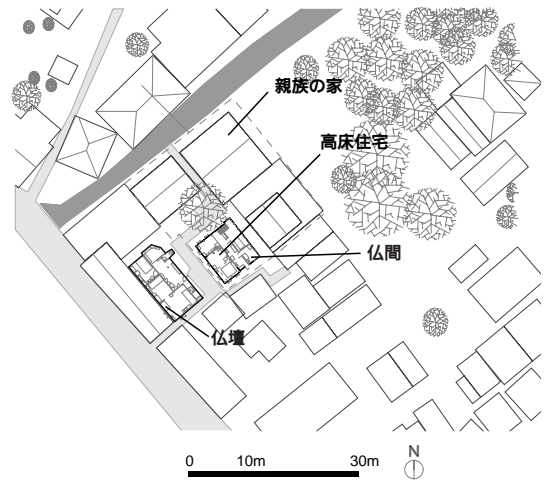


路地のサンパブーン 常にお供え物が絶えることはない。これほど人々に浸透したサンパブーンだが、もともとは仏教との結びつきはない。写真のような仏教寺院風の祠が広まったのは、実は1960年代以降である。

床下は、近所の友人も集まる親密な空間だ。高床式住居の多くは、床下を壁で囲って室内化している。

旧都心地区 貴族の屋敷地

旧都心地区にも貴族の住宅がある。貴族の屋敷地は、ヤーイ運河から



狭い路地に多くのサンパブーンが建つ。一般的に辻や行き止まり、大樹の根本などを選んで置かれる。いずれも軒下はさけられる。高床式住居のかつての主室である床下のデッキは、子供たちの居場所になっており、増築部分に仏間がつけられた。

一軒の家屋や屋敷地など狭い範囲を守護する「サンパブーン」が、一本柱の高い柱脚部を持つのに対し、より広範囲の土地を守護する土地神の「サンチャオティー」は、前者にくらべて低い四本柱の柱脚部をもつといわれている。

仏壇は東向きが最上で、西を向かないように置かれる。仏像の他、有名な僧の座像や出家した家族の肖像などが祭られ、日本と違い先祖の位牌は別に祭られている。



アジアの水辺から見えてくる水の文化

より安定した地盤の確保と同時に、水へのアプローチが可能な場所に住宅は好んで建築された。その後の建て増しにより、一見、水との関わりが弱い住宅も、もともとは水辺に立地していたのだ。

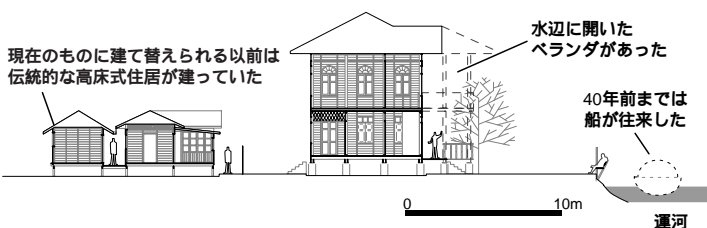
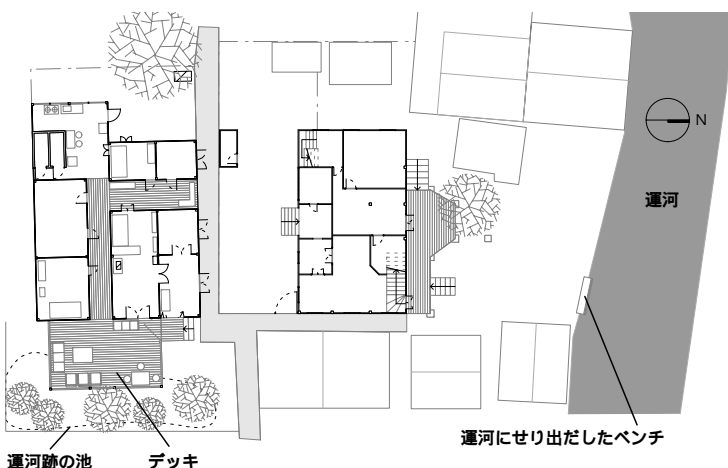
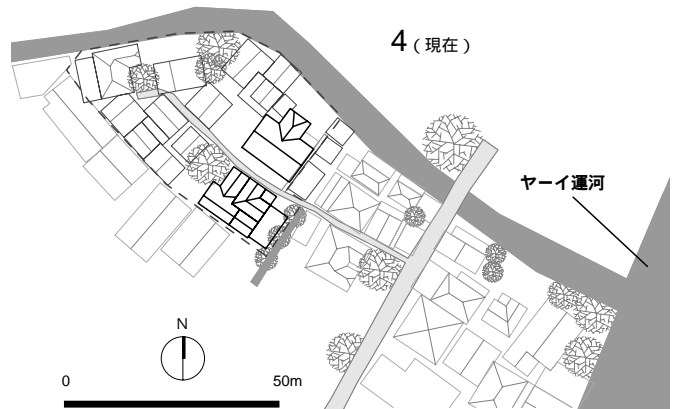
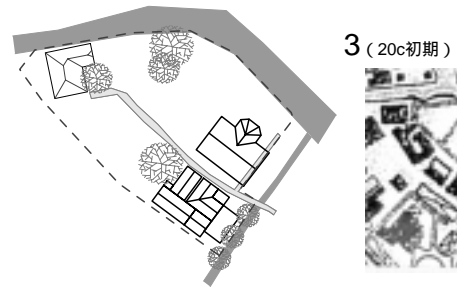
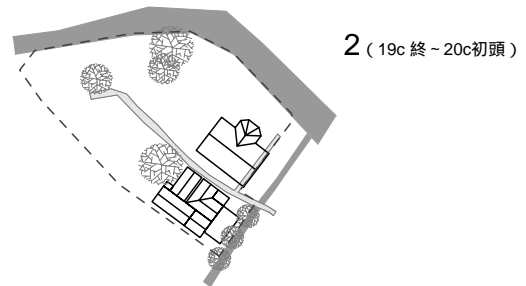
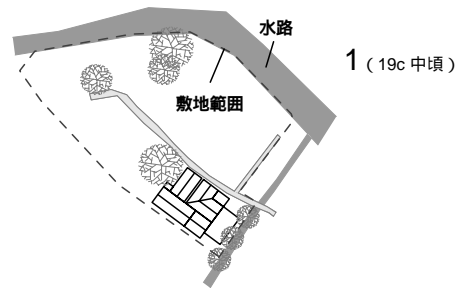
この構成は、建て替え後も変わっていない。運河が機能しなくなっても、住宅の空間構成が当時と変わらないのは興味深い。この住宅と支線運河との間に二番目の住宅がある。西洋風の意匠を持つ二層の木造高床式住居で、高床部分の柱を煉瓦とモルタルで覆っている点も、当時の貴族住宅の特徴である。

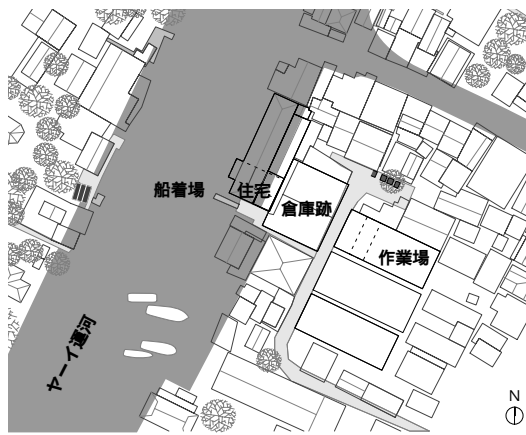
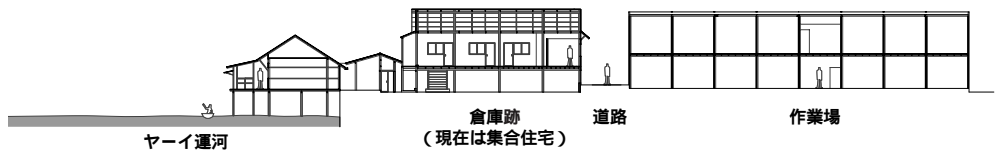
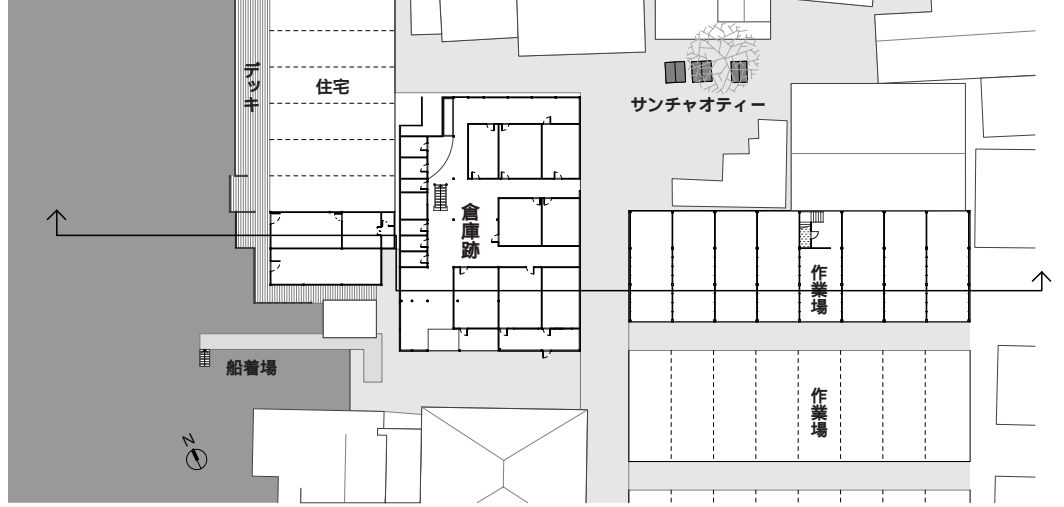
敷地のなかでの増築の方法にまで、そうした考え方があらわれている。チャオプラヤーの称号を持つ貴族の家では、現在、空き家を含めて七棟の建物があるが、最初の建物は運河から奥まった部分にあった。現在は建て替えられているものの、伝統的な高床式のタイ住宅が建てていたという。この住宅の前には、かつての運河の名残である池がある。その池に面してメインの生活空間となるデッキがとられている。



上：内陸側の家のデッキ かつては、このデッキの前まで運河から水が引き込まれていた。現在植物が生い茂る池に、その名残を感じることができる。現在の住宅は、ラーマ3世時代（1824-1851）に建てられた高床式住居とほぼ同じ場所に建て替えられたもの。当時の構成をそのまま受け継いでおり、大まかなプランは変わっていないようだ。
左：地図やデッキの形状などから、中央のアーチの前にはベランダがあったと思われる。現在は内部を間仕切り、集合住宅として使用されている。

貴族の屋敷地の変遷図 パンコクでは土地の多くは寺院や王族（国）の所有であり、さらに、敷地の中に親族が建て増しをしていく場合が多い。この敷地の場合も同様であり、ラーマ3世時代、敷地の最も内陸側に高床式住居が建てられたのが始まりである。その後、運河側にベランダを持った西洋風の高床式住居が建てられた。





産業拠点 現況図(上)と1932年の地図(下)を比べると、宮殿跡を利用して作られたことが解る。



水辺の産業拠点 陸揚げされた積み荷は、作業場で加工され倉庫にストックされた。水際にある高床の長屋は後から建てられたもので、以前は倉庫が直接運河に面していた。地区の北側は住宅が密集しており、ヤーイ運河と北側の運河の使い分けが読みとれる。

産業拠点の作業場兼住宅



旧都心地区 水辺の産業拠点

ムスリム地区の隣、貴族の屋敷地の対岸に、興味深い水辺の産業拠点がある。ここには、かつての王族の屋敷跡地に倉庫街が形成された。倉庫街の構

造は実に明快なものとなっている。運河に面する細長いデッキを持つ住宅と、その裏の大きな倉庫、さらにその奥の道路を挟んだ場所に小さな工場が立地する。これら三つの施設と水をつなげているのは、運河と垂直に引き込まれた路地である。運河に面する住宅は新

しく、三〇年ほど前に建てられた。それまでは大きな倉庫が直接水辺に面していた。倉庫では、魚や米がそのままあるいは加工してストックされ、その加工は道を挟んだ工場で行われていた。脇に引き込まれた運河には中国人が多く住み、土地神や財神を祭る彼らの祠

が路地に並んでいる。荷揚げ、加工、保管の作業に応じて空間が構成され、その背後にそこで働く人のための居住空間が計画されているのだ。荷揚げ作業に支障のないように、別の運河に面して住まいが確保されているのは実に機能的である。

旧都心地区 橋詰め市場

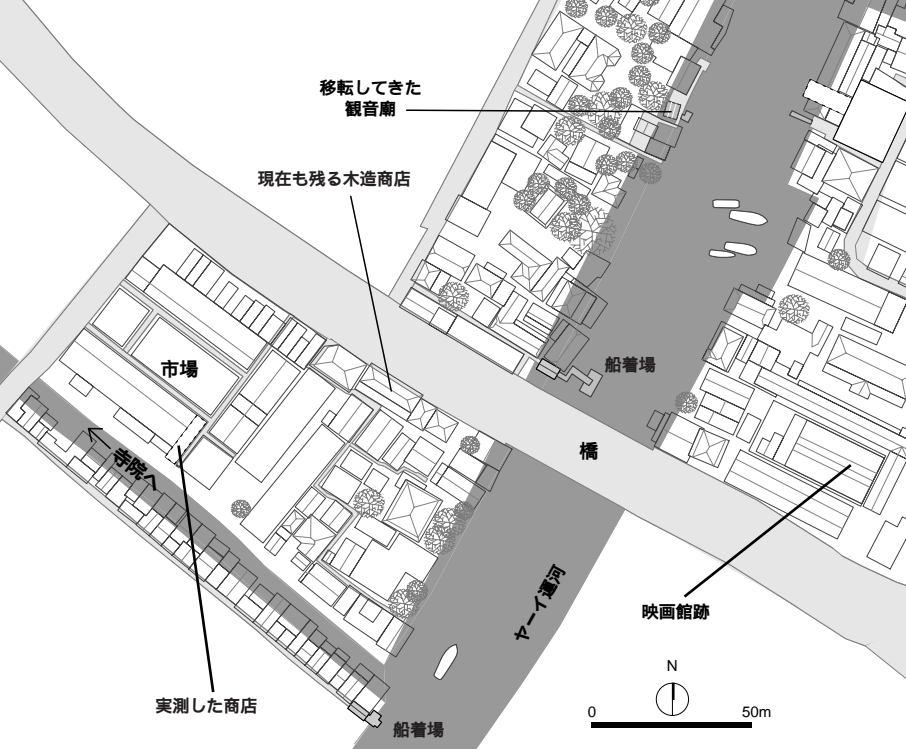
倉庫街から橋詰め市場へは、ヤーイ運河に架かる橋を通って行くこともできる。一九三三年以前のトンブリーで唯一大きな橋が架けられた場所だ。

市場は、ヤーイ運河に架かる橋のたもとにあり、同時に寺院へいたる運河沿いという交通の要衝に立地している。往事の賑わいを示すかのように、対岸にはかつての映画館が残っている。

市場には、寺院へと通じる運河から商品を運び込む。中央のアパートがある場所は、かつて木造の屋根が架けられた市場の中心であった。その周りを一階が店舗で、二階に居住部分を持つ棟割長屋が取り囲む。運河に接する店舗は、運河から商品を荷揚げして、市場に面する部分で商品を売っていた。

こうして、水と結び付きながら、店舗の前後で空間を効率的に使い分けているのである。現在の建築は一九六〇年代に建てられたものだが、木造である以外は、それ以前も同じ空間構成であった。

かつてこの水辺の市場には、中国人

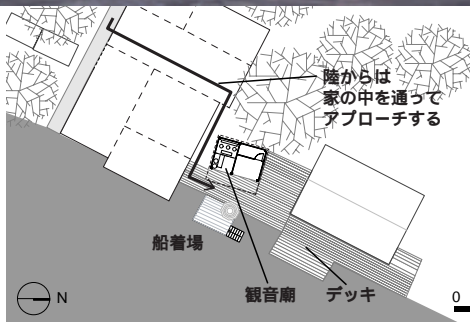


上：橋詰め市場 1932年の地図

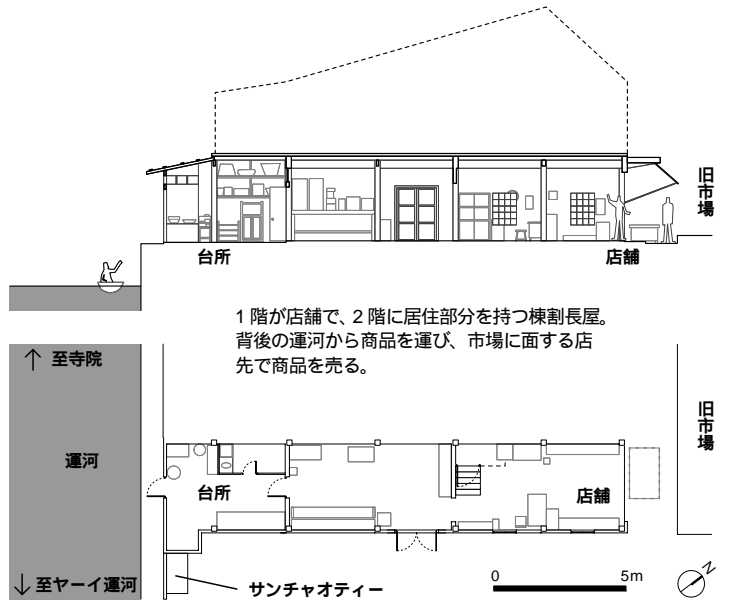
左：現況図

おそらく1932年当時、幹線運河に架けられたトンプリー唯一の橋である。架橋後、橋のたもとの貴族の邸宅が市場となった。対岸には映画館もある。

下：橋詰め市場 中央の市場は、その後買い取った企業によってアパートに建て替えられたが、周囲の店舗は今も賑やかだ。



水辺の観音廟
観音廟の敷地は背後の屋敷から無償で提供されている。現在でも参拝者は絶えない。お祭りの時には50人ほどが訪れるという。



1階が店舗で、2階に居住部分を持つ棟割長屋。背後の運河から商品運び、市場に面する店先で商品を売る。

以上、トンプリー旧都心地区の特徴的な地区を見てきた。これだけ多種多様な民族、宗教、職業、階層といった社会的背景を持つ人々がつくりだす空間にも、いくつかの共通する特徴が見いだせる。それは、すべての地区が水からのアクセスを前提としていること、重要な宗教施設や初期の住宅、各地区の中心となる道路は、いずれも安定した地盤を求めて運河から一定の距離をとるといった二点である。それに対し、ノイ地区の積み替え港にある倉庫群やチャオプラー川沿いの貴族の住宅など、こうした水辺の環境形成の作法から逸脱したところでは、今では滅失の傾向にあるのも興味深い。バンコクの水辺に暮らすうえで、異なる社会的背景を越えて獲得した共通の原理といえるだろう。

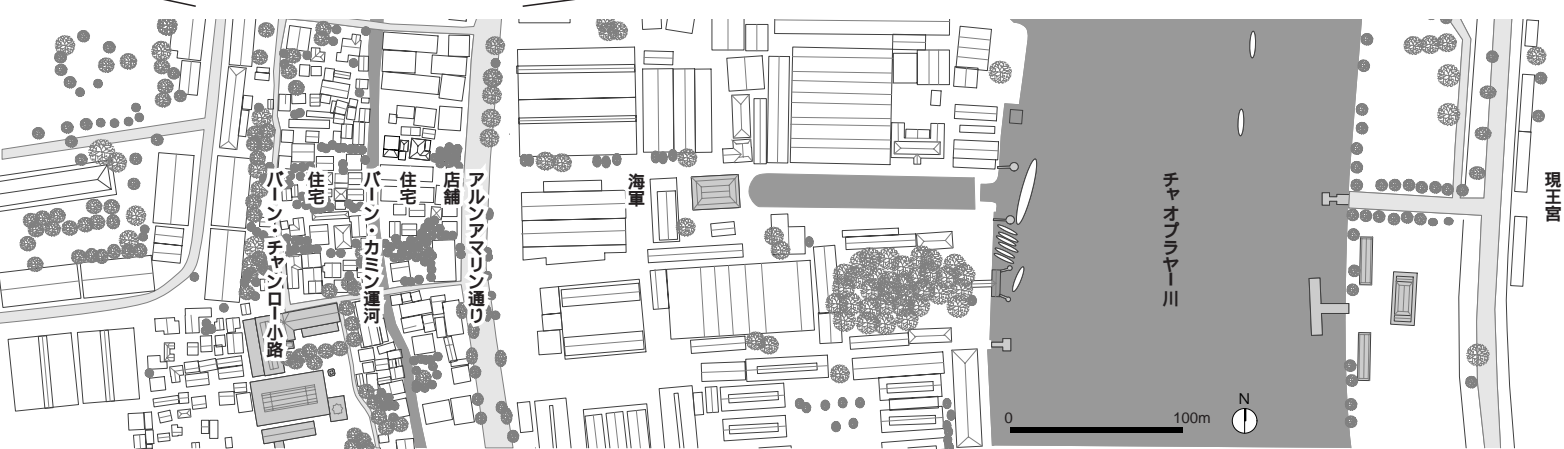
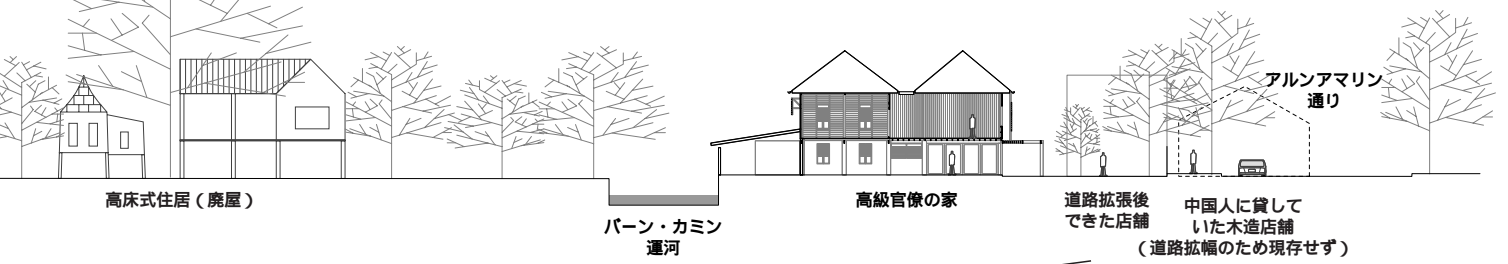
の信仰する観音廟が置かれていた。しかし、道路拡張のため移転を余儀なくされ、現在の水辺の私有地に移される。そこへは、靴を脱いで住宅の内部を通り抜ける必要がある。ここで重要なのは、参拝に手間がかかるのに、わざわざ水辺に廟を立地させ、なおかつ常時三〇人ほどの参拝者が訪れるという点だ。水がどんどん遠くなっている現代にあっても、水の記憶はしっかりと継承されている。

旧王宮地区

この地区には、十八世紀後半にパンコク最初の王朝、トンブリー王朝が置かれた。その後、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、チャオプラヤー川に臨む数々の宮殿は、ラーマ五世の命により、次々と近代施設へ姿を変えていく。この地区を東西に流れるワット・ラカン運河を挟んで、北部には、鉄道のノイイ駅、タイ初の近代病院であるシリラート病院、医学校、官僚の住宅街が建設され、南部には近代的な海軍施設がつくられた。つまり、ラーマ五世は、かつての宮殿跡地を利用して、富国強兵を押し進めるための近代的な再開発を実施したのである。

この地区の運河、道路からなる空間構造を見ると、チャオプラヤー川に面して近代施設が配置され、その西にアルンアマリン通り、さらにその西にバーン・カミン運河が流れ、運河と平行にバーン・チャンロー小路が通る。つまり、この地区は非常に強い南北軸を持つ。

では、まずアルンアマリン通り沿いから見ていこう。この道路は、トンブリーで最も早く整備された道路であり、一八九六年の地図にも確認することができる。旧王宮地区は、東西のワット・ラカン運河を境に、北部と南部で住民の職業も異なる。それに応じてアルンアマリン通りに並ぶ住宅も大きく



上：旧王宮地区 東西断面 トンブリーで初期に建設された近代のアルンアマリン通りに沿って高級官僚や軍人、医者などの住宅がつくられた。旧王宮地区の北寄りに位置するこのあたりでは、とくに煉瓦や石を用いた立派なものが多くなり、道路や敷地も広く整然としたものになっている。バーン・カミン運河を挟んで西側の部分も同様に広い。だが、小路側と水路側の敷地に分割されたため、運河にしか面さない部分は廃屋になっているケースもあるなど、隣接しているが全く性格の異なる3つの敷地で構成されている。

中：ワット・ラカン運河とモーン運河に挟まれたあたりで、旧王宮地区のほぼ中央部分の現況図。図の場所は上の東西断面よりも、やや南側にあたる。チャオプラヤー川の両岸には国家を象徴する大規模な施設が、その裏側にバックヤードとしての店舗、住宅街が形成された。

左：1932年の地図では、道路沿いの店舗とその裏の住宅地の関係がはっきりと読みとれる。



チャオプラヤー川から見たワット・アルン アユタヤ時代からの古刹で、トンブリー時代には現在のワット・ポーのような王室寺院であった。中央にそびえるブラン（塔堂）は比較的新しく、19世紀前半に現在の規模に大修築された。

変わる。

北部には、内務官僚、警察官僚、鉄道職員などの文官が多いのに対し、南部ではチャオプラヤー川沿いの海軍施設で働く武官の住宅が並ぶ。つまり、この通りの住宅街は、チャオプラヤー川沿いの近代施設で働く、高級官僚のためのバックヤードとしての性格が強い。それぞれの住宅は、洋風の装飾を持ち、敷地の裏に運河が流れるという特徴を持つ。これまで見てきたトンブリーの様々な地区の高級住宅が水辺から一定の距離をとり、地盤の安定性を求めるのに対し、ここでは多くの住宅が道路に正面を向け、運河から奥まった場所ではなく、道路側から奥まった場所につくられている。通りから住宅までの距離により住宅の格を表すという、陸の都市の考え方によるものである。とくに、北部では敷地の道路側には店舗をも建設しているのは興味深い。

一八九六年の地図を見ると、住宅の前面に、すでに店舗が建設されているものも確認できる。早い時期から鉄道の駅や病院が置かれた北部は、水上交通から陸上交通へと移行する、いわば道路を中心とした近代化への指向が強い。一方、南部では店舗があっても平屋で、伝統的な住宅地としての性格を顕著に示す。



と城壁の外堀であったことが知られる。運河の西岸には短冊状の敷地が並び、タイの伝統建築様式である高床式住居の住宅が目につく。しかも、それは南部に多く、北部よりも幅の広い運河と一体となって水との結びつきを強めている。この地も、もともとは王宮などで働く官僚の住宅地であった。

さらに、その西には、バーン・チャンロー小路が南北に通る。この小路は北のワット・ウイセートカーンと南のワット・プラヤータムという二つの寺院を結ぶ。バーン・チャンローとは日本語で鋳物屋集落という意味であり、古くは、仏像や仏具をつくる職人の家が並んでいた。しかし、この通りの名前をもう少し深く考えてみると面白いことに気が付く。タイ語には、一般的に村や集落を表す言葉が二つある。日本人には同じように聞こえるが、バ

ーン(グ) banooバーン banである。トンブリーで最も一般的なものは、バーン(グ)であり、これは水辺に発達した集落に用いられる。バンコクの名前も、タイ語の発音に近く書くとバーン(グ)・コックとなる。それに対し、バーンは水辺ではなく、陸の集落に用いられる。

バーン・チャンローのバーンは、陸の集落を意味する。一八九六年の地図を見ると、バーン・チャンローがすでに存在し、さらに一九三二年の地図からも従来から道路であったことが確認できる。当時は、おそらく木製の歩道(ターン・チュアム)と考えていいだろう。旧王宮地区では、南北のバーン・カミン運河を境に、その東と西においても近代と伝統の異なる空間が並存していたことになる。

右上：軍人の住宅 底から垂れるバジボードが美しい
右下：店舗と背後の住宅 道路沿いに並んでいる平屋の木造長屋が店舗で、その背後に住宅が見える。
左：バーン・カミン運河 トンブリー王朝時代にすでにあった南側の部分を延長し、同時に建設された城壁の外堀となった。ラタナコシン側のルート運河にも城壁が建設され、チャオプラヤー川を内部に取り込んだひとつの城塞都市であった。その姿は、まさに水上都市トンブリーにふさわしい。城壁は遷都後撤去され、ラタナコシンと旧王宮地区は陸の都市へと変貌していく。





水の文化の背景を探る

トンブリー地区がいかに多様な背景のなかで成り立ってきたのかを見てきた。いずれも水を重要な軸としながら、民族や階層といった社会構造と水路や街区といった都市構造が有機的に絡み合い、それぞれにふさわしい特徴的な都市空間を作り出している。同じ水辺でも、実に様々な論理のもとにまちが作られ、個々の場所の条件に応じて人々が暮らしている。多様な民族が集

合して生活する姿はエネルギーギッシュで、信仰のあり方も大きく異なっていた。

バンコクの水辺は、華麗や美しいといった印象からはほど遠い。むしろ雑多で統一感があまりなく、建築の質はお世辞にもよいとは言えない。もちろん、これまでもタイの水上市場マーケットや一部の水辺の集落が写真集や報告書として取り上げられることが少なくなかった。だが、それらの空間は近代以降に植え付けられた我々のモノに対する概念や見方からだけで評価したものが多し。つまり、社会も都市も民族

も異なる地において、それまでに染み付いた自分の尺度をできるだけ外地に持ち込まないという意識が必要なのだ。

そのためには、まず直接対象となる街区や建築といった、いわば目に見える物理的なモノそのものだけを扱うという姿勢を反省し、その空間の背後にある社会や歴史といった背景をも同時に読み解く必要がある。民族や階層といった目に見えない社会構造の仕組みを聞き取りによって解読し、それに応じて形成された空間の歴史的な層の重なりを解き明かす。それにより、建築の側からも、水の文化の本質をきちんと理解できるのである。

今回の調査研究は、多くのディスカッションを経て、こつとしたスタンスを全員が持つことから始めた。事前の膨大な史料考察から始まり、フィールドワークでは、きれいな町並みや立派な建物にまず目を向けるのではなく、水との関係の中で、それぞれの地区がどのような特徴を持っているのか、それによりいかなる街区が形成され、そこ

にどのような建築がつくられているのか、というふうに関連的に見る方法をとった。したがって、ときには今にも

倒壊しそうなボロボロの住宅や薄汚れた小さな店舗に入り込み、聞き取りや実測を行った。

そうしたなかで、とくに、どの地区でもタイ族特有の高床式住居が見られたのは興味深い。長い時間をかけてその地に根付くことは、「タイ人」への同化を意味したためであろうか。一方で、水辺の様々な信仰の空間は、民族ごとに独自の空間をつくりあげている点も指摘しておきたい。これらは、今後の調査研究に大きな示唆を与えてくれる。人々が水辺に根付いて暮らしていくプロセスを知ること、豊かなくらしを支える水と信仰の関わりを探ることは、日本における新しい人と水とのつきあい方を見つける重要な手がかりになるはずだ。

調査・図面作成協力

新藤泰江、小川将、奥富剛（法政大学）、
畑山明子（日本女子大学）、ゴップ、
ルークナム、ナンシー（チュラロンコン大学）、
トゥム（タマサート大学）



バンコク・タイに関する文献紹介

- スミット・ジユムサイ著、西村幸夫訳『水の神ナーガ』鹿島出版会 1992
- 中村茂樹・畔柳昭雄・去田卓矢著『アジアの水辺空間』鹿島出版会 1999
- 安藤徹哉著『建築探訪10都市に住む知恵』丸善 1992
- 加藤祐三編『アジアの都市と建築』鹿島出版会 1986
- ジャック・デュマルセ著、西村幸夫監修、佐藤浩司訳『東南アジアの住まい』学芸出版社 1993
- 友杉孝著『バンコク歴史散歩』河出書房新社 1994
- 友杉孝編『アジア都市の諸相』同文館 1999
- 大阪市立大学経済研究所監修、田坂敏雄編『アジアの大都市1バンコク』日本評論社 1998
- マイケル・スミーズ著、西村幸夫監修、渡辺誠介訳『バンコクの歩み』学芸出版社 1993
- 綾部恒雄、永積昭編『もつと知りたいタイ 第2版』弘文堂 1982
- 前川健一著『東南アジアの日常茶飯』弘文堂 1988
- ポーター著、富田竹一郎訳『タイからの手紙 上・下』勁草書房 1979
- トムヤンティ著、西野順治郎訳『メナムの残照 上・下』大同生命国際文化基金 1987
- 中村真弥著『タイ現代カルチャー情報事典』あゐ文社 2000
- 石井米雄監修、石井米雄、吉川利治編『タイ現代用語事典』同朋舎出版 1993

アジアまち居住研究会

～タイの水辺とくらしプロジェクト～
 アジアまち居住研究会では、中国の北京や蘇州、タイのバンコク、インドネシアのバリなどを対象に、アジアの都市と建築の関係を歴史的な視点から探りつつ、そこに生活する人々のくらしのあり方を調査・研究しています。この作業は、近代日本の西欧中心主義に対立することを目指したのではなく、そこから次の世界へ抜け出すため、それぞれの地域で独自の展開を図りながら、新たな方法論や枠組みを創出することに目的があります。とりわけ、21世紀のアジアにおいては、人口増加や生活の近代化により水需要が増大し、それによる都市化と水環境の問題が重要なテーマとなるはずで、タイの水辺とくらしプロジェクトでは、その方法論として、まず水と強く結び付く住まいや信仰のあり方を探っていきたく考えています。

高村雅彦

法政大学工学部建築学科専任講師。
 1964年生まれ。法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修了。博士（工学）。1989年中国政府給費留学生として上海同济大学に留学。東京テクニカルカレッジ講師を経て2000年より現職。専門はアジア建築史・都市史。建築史学会賞、前田工学賞を受賞。著書に『中国江南の都市とくらし 水のまちの環境形成』（山川出版社）『中国の都市空間を読む』（山川出版社）『北京 都市空間を読む』（共編、鹿島出版会）『中国江南の水郷都市 蘇州と周辺の水の文化』（共著、鹿島出版会）などがある。

潮上大輔

法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程在学中。
 1976年生まれ。東京農業大学農学部造園学科卒業。「SDレビュー2001」入選。

岩城考信

法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程在学中。
 1977年生まれ。法政大学工学部建築学科卒業。2001年より文部科学省アジア諸国等派遣留学生として、チュラロンコン大学社会調査研究所に留学中。著書に『実測術』（共著、学芸出版社）



霽 霖 霞 雷 霽 霽 霽 霽 霽 霽

1967(昭和42)年水資源開発公団に入社。勤務のかたわら30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。昨年退職し現在、日本河川開発調査会 筑後川水問題研究会に所属。水に関わる啓蒙活動に専念している。

水・河川・湖沼関係文献研究会 古賀邦雄

女流俳人中村汀女編『雨』（作品社、一九八六年）は、宮本輝、五木寛之、竹内寛子、樋口一葉、團伊玖磨等、四九名の著名人の雨に関する名随筆がまとめられている。團伊玖磨の「雨乞い」はおもしろい。干ばつの時には、相模の大山・阿夫利神社に各宗教団体が集結して、雨乞い歌大会を開催すればよいと提案されている。その場合の曲目は、「あめよふれふれ、なやみを流すまで」の「雨のブルース」、「あめあめふれふれ母さんが」の「雨ふり」、「さんさ時雨か萱野の雨か」の「さんさ時雨」がよいと記されている。できれば鉦や太鼓を伴奏にと、音楽家らしい発想である。

俳句は五七五、十七文字、世界一文字の少ない文学である。手塚美佐著『雨・虹』（飯塚書店、一九九七年）は、雨と虹の俳句のできるまでの技法をつづる書である。この書から二句を掲げる。

一 輪草日照雨明るくまた暗く（石田小坡）
ゆけどゆけどゆけども虹をくぐり得ず（高橋重信）

秋月さやか文、高橋真澄写真『雨』（青青社、一九九八年）は、雨の占いに ついての書である。雨占いを著した書は珍しい。

宮尾孝著『雨と日本人』（丸善、一九九七年）は、雨と日本人の精神的風土についてのエッセイである。歌手川中美幸のヒット曲「遣らす雨」をとりあげている。遣らす雨は、恋しい人や客を帰らせないよう

に激しく降る。客を留める雨、留客雨（りゆうきゃくう）ともいう。著者は、英語の世界ではただRAINのみで表すのに、日本人は千変万化の雨をとらえる情の深さに感嘆するという。

建築美に借景があるように、小林亨著『雨の景観への招待 名雨のすすめ』（彰国社、一九九六年）は、日本人の雨の景観美を論じた書である。著者は景観工学を専門としている。広重画の「名所江戸百景高輪うしまち」、鳥居清長画の「三囲（みめぐり）の夕立」、小林清親画の「東京新大橋雨中図」等をかかげ、雨の景観美を追求している。さらに、建築に雨線、雨垂れ、波紋などの雨の景観をとり入れ、雨の風景を日本人の心の癒しとしたいと述べている。

日本建築学会編『雨の建築学』（北斗出版、二〇〇一年）は、建築に「雨水循環系を保全し育む」必要があることと、建築と敷地に「植物のような生態的な働き」を持たせることが大事だと説いている。雨水を積極的に取り入れる建築を目指すべきことを説いている。雨水という水資源を有効に活かす方法であり、それは洪水を防ぎ、濁水を和らげ、生態環境を守ることにつながる。雨水の利活用は、今までの日本の古代からの水の使い方を再現することであり、現代の水の使い方を反省することもある。このことは、新しい水の文化を構築する際に大いに役立つであろう。



編集後記

今回より連載「水の文化書誌」が始まりました。高橋順子著『雨の名前』の売れ行きの良さが昨年評判となりましたが、いったいどれだけの「水の文化」本が世の中に発行されているのか。地方出版物もご紹介してまいりますので、ご期待下さい。

8号「水の文化楽習実践レポート、こどもが動く地域もつこく」で登場頂きました岡山市立平福小学校の先生方のお名前で、「寛宏治」(2頁、5頁)と記しましたのは、「樋口宏治氏」の誤りでした。「ご本人および関係の皆様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫びいたします。

ミツカン水の文化センター機関誌

「水の文化」第10号

発行日 2002年(平成14年)2月

発行 株式会社ミツカン水の文化センター

〒475-8585 愛知県半田市中村町2-6

株式会社ミツカングループ本社広報室内

電話 0569(24)5087

《お問い合わせ・ホームページアドレス》

ミツカン水の文化センター 東京事務局

〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F

電話 03(5762)0244

FAX 03(5762)0246

<http://www.mizu.gr.jp/>

ミツカン水の文化センター